

クロスロード

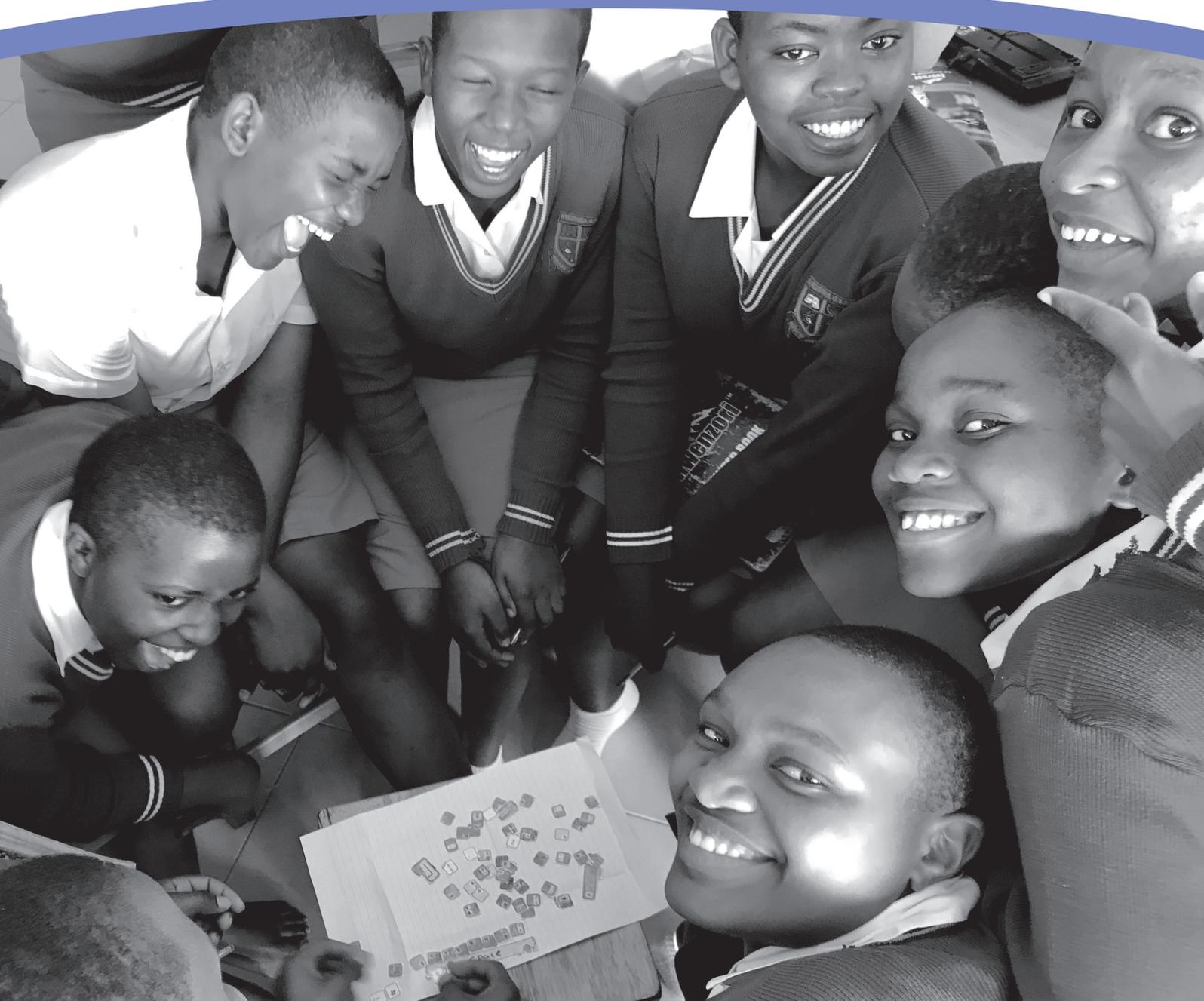
4



特集

JICA 在外事務所からのエール

派遣国の横顔 ～ウガンダ～



現在の派遣国数

63カ国



JICA海外協力隊 派遣現況

(2021年2月末現在、単位：人)

■ アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	2	
エチオピア	2	
ガーナ	12	
ケニア	4	
ザンビア	9	1
ジブチ	1	
ジンバブエ	5	
セネガル	9	
タンザニア	6	1
ナミビア	1	
ベナン	2	
ボツワナ	2	
マダガスカル	3	
南アフリカ共和国	1	
モザンビーク	6	
ルワンダ	9	

■ アジア地域

国名	一般	シニア
インド	7	
インドネシア	1	
ウズベキスタン	6	1
カンボジア	4	
キルギス	3	
タイ	3	
中華人民共和国	3	
ネパール	9	1
東ティモール	4	
フィリピン	5	
ブータン	2	1
ベトナム	9	
マレーシア		3
ミャンマー	1	
モルディブ	2	
モンゴル	1	
ラオス	8	

■ 大洋州地域

国名	一般	シニア
キリバス	1	
サモア	1	
ソロモン	4	
トンガ	3	
バヌアツ	7	
バブアニューギニア	3	
パラオ	3	
フィジー	3	
マーシャル	1	
ミクロネシア	4	

■ 欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	1	

■ 中東地域

国名	一般	シニア
チュニジア	2	
モロッコ	1	
ヨルダン	2	

■ 中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
アルゼンチン		9		
エクアドル	2			
エルサルバドル	4			
グアテマラ	4			
コスタリカ	8			
コロンビア	3			
ジャマイカ	3	1		
セントルシア	1			
ドミニカ共和国	13		3	
パラグアイ	6		1	
ブラジル				14
ベリーズ	1			
ペルー	6			
ボリビア	9			
ホンジュラス	7			
メキシコ	1	2		

■ 合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中 (男性/女性)	246 (119/127)	20 (15/5)	18 (7/11)	0 (0/0)	284 (141/143)
累計 (男性/女性)	45,779 (24,306/21,473)	6,553 (5,298/1,255)	1,542 (597/945)	547 (252/295)	54,421 (30,453/23,968)

一般＝青年海外協力隊/海外協力隊

シニア＝シニア海外協力隊

日系一般＝日系社会青年海外協力隊/日系社会海外協力隊

日系シニア＝日系社会シニア海外協力隊

クロスロード

2021 APR.

Contents

4

JICA Volunteers' Reports

- ▶日本企業の協力を得て、トンガの魅力を表現する絵本を制作（トンガ）
- ▶多文化共生を推進する活動で、「ふるさとづくり大賞」を受賞（日本）

派遣国の横顔 ～ウガンダ～

6

計画・行政

篠崎 愛さん（コミュニティ開発・2017年度2次隊）

8

人的資源

森 亜矢子さん（PCインストラクター・2017年度2次隊）

特集

JICA在外事務所からのエール

10

ペルー

12

ケニア

14

ベトナム

16

パプアニューギニア

18

“失敗”から学ぶ

中東由子さん（チリ・作業療法士・2017年度2次隊）

20

希少職種図鑑

- ▶エアロビクス 東海林由貴さん（ボリビア・2016年度2次隊）
- ▶溶接 山野彰嗣さん（シニア海外協力隊員／カンボジア・2016年度3次隊）

22

JICA海外協力隊的プチテクガイド

改善の方法／スマホ撮影術をブラッシュアップ

24

JICA Volunteers' Before ▶ After ～人生を変えた2年間～

地域づくりに取り組む団体の職員 白井美穂さん（ガーナ・エイズ対策・2008年度3次隊）

26

帰国後よもやま話

IT分野隊員篇

28

Pick Up OB・OG会

- ▶青森県青年海外協力協会
- ▶JOCVバレーボール会

30

先輩隊員のシューカツ記

学校法人沖縄科学技術大学院大学学園 職員 比嘉航也さん（ブータン・小学校教育・2017年度1次隊）

32

JOCV SPORTS NEWS

34

JICA海外協力隊のつぶやき

お題：「味付け」

35

INFORMATION

36

隊員めし

スリランカの伝統菓子「ヘラパ」風の柏餅

職種別索引	掲載ページ
村落開発普及員	14
コミュニティ開発	4、6
行政サービス	12
コンピュータ技術	26
溶接	21
青少年活動	10
環境教育	16
エアロビクス	20
体操競技	32
バレーボール	29
PCインストラクター	8、26、36
小学校教育	30
看護師	13、17
助産師	15
作業療法士	18
エイズ対策	24

国別索引	掲載ページ
ウガンダ	6、8、36
ガーナ	24
カンボジア	21
ケニア	12、14
ジャマイカ	32
スリランカ	16、36
タイ	4
チリ	18
トンガ	4
ニカラグア	10
ネパール	15
パプアニューギニア	16
ブータン	30
ベトナム	14、17
ペネズエラ	13
ペルー	10
ボツワナ	12
ボリビア	20

出身都道府県別索引	掲載ページ
北海道	12
青森県	28
山形県	20
東京都	6、10、13
神奈川県	24
静岡県	15
京都府	32
大阪府	21
鳥根県	14
山口県	16
徳島県	8
沖縄県	30

【凡例】

JICA海外協力隊の方々（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協子さん（ウガンダ・青少年活動・2020年度3次隊）

氏名	派遣国	職種	隊次
----	-----	----	----

JICA海外協力隊の種類（呼称）は、「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。特に明記されていない場合は「青年海外協力隊」となります。

本誌は、JICA海外協力隊が活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元に関する有益な情報を提供し、対象者に配布しています。

ロゴタイプデザイン：(株) AND

レイアウト：(株) AND

印刷・製本：弘報印刷(株)



上：絵本の1ページ。和紙のような風合いは、木の皮でできたトンガの伝統的な布を複製して出している 左：絵本の表紙

制作の流れ	
2020年	4月 絵本の制作を着想
	5月 企画についての意見を求めるアンケートをトンガ隊員のOB・OGたちに実施
	7月 ・制作を開始 ・セイコーエプソン（株）からの協力を取り付ける
2021年	1月 トンガと日本の関係者による原稿の確認が完了
	2月 印刷・製本
	3月 トンガと日本の関係各所に寄贈（予定）
	5月 改訂版と動画を制作（予定）

日本企業の協力を得て、トンガの魅力表現する絵本を制作

Tonga

文=以下、派遣国はいずれもトンガ／加藤美希（コミュニティ開発・2019年度1次隊）、原口風花（美術・2019年度1次隊）、新井雪那（日本語教育・2018年度1次隊）、小林真子（卓球・2018年度3次隊）、尾上香織（音楽・2017年度1次隊）

新型コロナウイルス感染症の拡大により協力隊員の一時帰国が始まった直後の2020年4月から21年2月までの約1年をかけて、一時帰国中のトンガ隊員とすでに任期を終了しているトンガ隊員の計5人で、1冊の絵本を制作しました。「シオネくん」というトンガ人の小学生の1週間の生活をたどりながら、トンガの文化や習慣、およびそれらとSDGsとのつながりについて考察するという構成で、トンガの素晴らしさをトンガ人に伝えることを第一の目的とするものです。写真とその解説で情報を補強するコーナーも散りばめており、トンガの魅力が盛りだくさんな全40ページの絵本となりました。トンガ語のタイトル『O'fa atu（愛する）』には、「たくさんの愛をくれたトンガに、私たちの愛を届けたい」という思いを込めています。日本人にも楽しんでもらいたいと考え、英語版と日本語版の2冊をつくりました。

企画が生まれたのは、一時帰国する飛行機の中でした。「絵を通して健康や環境への意識を高める活動がしたい」と考えていたトンガ隊員の加藤と原口が、「絵本をつくらう」と意気投合。その後、同じく一時帰国となったトンガの先輩隊員である新井と小林、さらにすでに任期を終えていた尾上も参加することとなり、絵本制作を開始しました。

構想を練る作業は、2週間に1回程度のオンラインで進めました。現地で活動する中で、私たちはトンガ人の温かさや伝統、豊かな自然など、変わらずに残されている財産に感銘を受けました。一方で、トンガは医療や教育など暮らしの発展も進んでいます。そうしたトンガのあり方は、国連が提唱する「SDGs」を達成するためのヒントが詰まったものではないか。そんな思いをトンガ人に伝えるべく、絵本のテーマは「こんなにカッコいい！ トンガ！」に設定しました。

シナリオづくりは加藤、作画は美術隊員の原口、その他の要素は新井、小林、尾上が主に担当しました。オンラインという方法で協力隊活動の幅が広がること、派遣国を表現する教材を他の隊員と議論しながら共に進めることで、派遣国に対する理解が深まることなど、制作を通じてさまざまな学びを得ることもできました。

制作では、私たちの思いに賛同いただきましたみな方にご協力をいただくこともできました。印刷は、セイコーエプソン株式会社社様が柔らかなタッチや質感を表現する独自の「マイクロピエソ技術」を使って無償で行ってくださいました。また、トンガの同僚や友人たちには、原稿の問題点を指摘していただきました。

制作した絵本は今後、トンガと日本の学校や公共施設などに寄贈し、授業などで活用していただくことと考えています（※）。また、絵本をご覧いただいた方々に感想を聞くアンケートを行い、その結果を踏まえて改訂を重ねながら、市販や動画での配信などを行うことも計画しています。この絵本を通じて、多くの方々にトンガの魅力を知ってもらえたらうれしいです。

※ 2021年3月11日からJICA中部なごや地球ひろばの企画展・パネル展「Story of the Pacific Islands」にて展示中(7月11日まで)。その他、一部のJICA国内拠点やJICAデスク等で閲覧可能。

団体概要	
名称	サワディー佐賀（任意団体）
設立	2018年1月
事務所	佐賀県佐賀市高木町3-10（認定NPO法人地球市民の会内）
代表者	山路健造（フィリピン・コミュニティ開発・2014年度2次隊）
会員数	62人（LINEグループ登録者）
連絡先	[電話] 0952-24-3334 [e-mail] yamaji@terrapeople.or.jp
事業	「タイ人にとって住んでよし、訪れてよし」のまちづくりを目標に、佐賀県で主に以下の活動を実施。 ①タイ文化の発信（タイ料理教室やタイ語教室の開催など） ②タイ人観光客が多く訪れる祐徳稲荷神社でのタイ語の通訳ガイド ③東京2020オリンピック・パラリンピックのホストタウンおもてなし事業の支援 ④災害時のタイ語による情報発信



祐徳稲荷神社を訪れたタイ人観光客への通訳ガイドを行うサワディー佐賀のメンバーたち。左端が山路さん

多文化共生を推進する活動で、「ふるさとづくり大賞」を受賞

Japan

文=山路健造さん（フィリピン・コミュニティ開発・2014年度2次隊）

サワディー佐賀のタイ料理教室



タイ人やタイが好きな佐賀県住民のグループ「サワディー佐賀」が、総務省の「令和2年度ふるさとづくり大賞」で団体表彰（総務大臣表彰）を受賞しました。「タイ人にとって住んでよし、訪れてよし」のまちづくりに取り組み、2018年の立ち上げから私が代表を務めてきました。「ふるさとづくり大賞」では、タイ料理教室の開催など地域にタイ文化を発信する活動に加え、災害時にタイ語による情報発信なども実施していることに対して、「国際交流の参考になる取り組みをしている」と評価していただきました。

私は協力隊の任期終了後の17年1月に、国際協力活動などを行う佐賀市の認定NPO法人地球市民の会に入職しました。当会はタイ東北部の支援もしており、私はタイに関する事業の担当になりました。佐賀県はタイの映画やテレビドラマのロケ誘致に成功した影響でタイ人観光客が増加しており、それを受けてタイとの文化交流を目的とするイベントが開催された際は、当会も協力。タイ人留学生やタイ留学経験者とタイ料理を提供するブースを出展しました。

そのイベントでは、久しぶりのタイ語会話を楽しむタイ人留学生の姿も見られました。同じタイ人留学生同士でも、大学が

違つと知り合つきつかけがなかったからです。そのときに思い出したのは、私自身がフィリピンで「外国人」として暮らした協力隊経験です。選挙の影響で半年以上、有機農業を普及させる活動が止まって意欲を失っていた時期、私を励ましてくれたのは協力隊仲間と現地に駐在する県人会や校友会の方々などでした。そうして、「佐賀県で暮らすタイ人同士が支え合えるようになる場をつくりたい」という思いから設立したのが、サワディー佐賀でした。

佐賀県は東京2020オリンピック・パラリンピックのタイのホストタウンに登録されるなど、ロケ誘致以外にもタイとの縁があるため、サワディー佐賀の活動も多岐にわたっています。タイ人観光客が増えた祐徳稲荷神社では、通訳ガイドを無償で引き受けています。近年、特に力を入れているのが、災害時のタイ語による情報発信です。タイ語は行政が災害時の情報発信で使う言語とされていないことから、19年8月の佐賀豪雨を機に始めた活動です。コロナ禍に入ってから、特別定額給付金の申請書の「記載事項」の翻訳も行いました。

現在は、行政が災害時の情報発信で使う言語となっていないミャンマーとスリランカの言語についても、タイ語と同様の取り組みが行われるよう、サワディー佐賀のよなグループを結成するための支援も進めています。「災害時の情報発信で外国人住民の母語がすべてカバーされている佐賀県」を実現するというのが、今の私の目標です。

派遣国の横顔

JICA海外協力隊の派遣国ごとに、それぞれの代表的な職種・分野の活動例を、任地の文化や様子と共に紹介します。



Field 1

計画・行政



しのぎ あい
篠崎 愛さん
(コミュニティ開発・2017年度2次隊)

PROFILE

1992年生まれ、東京都出身。民間企業に営業職で3年間勤務した後、2017年9月に青年海外協力隊員としてウガンダに赴任。19年9月に帰国。現在はJICA東京で草の根技術協力事業を担当。

活動概要

- カムリ県庁に配属され、稲作に関する主に以下の活動に従事。
- 農家への技術指導の支援
- 農家グループや農家組合の設立支援
- 灌漑・排水技術に関する研修の実施支援

「コメの消費が増えるなか、収量のより高い稲作技術の普及に尽力

コメの国内消費が増すなか、以前から稲作が行われていた県の県庁に配属された篠崎さん。稲作を専門とするカウンタートパート(以下、C/P)と共に、農家グループの立ち上げや、栽培品種や栽培法を改善するための働きかけに取り組んだ。

篠崎さんが配属されたのは、ウガンダ東部地域に位置するカムリ県の県庁。求められていた活動は、農林水産業を所管する生産局の稲作振興事業を支援することだ。

① 国内では、トウモロコシ粉を練ってつくるポシヨや、蒸した調理用バナナをつぶしてつくるマトケが代表的な主食だが、近年はコメの消費が増えてきた。消費の多くを輸入米が支えているためコメは高価であり、消費地は都市部が中心。カムリ県はコメの一大消費地である国内第2の都市ジンジャに近く、降水量も多いため、以前から稲作が盛んな地域だった。問題は収量の低さだ。栽培されてきた

のは水稲の在来品種が一般的だが、病気にかかりやすく、稲穂の背が高いため鳥に食べられやすいといった難点があった。栽培法も田に直接種を播く直播栽培で、苗床で苗を育てる移植栽培ほどの収量は見込めない。

そうしたなか、生産局では稲作の振興が農家の収入向上に有効だと考え、より高い収量が望める水稲品種「WITA9」の種もみの配布や、移植栽培の指導などを、県内18カ所に配置する農業普及員を通して進めていた。農業普及員にはそれぞれ専門とする農作物がある。稲作を専門としていた農業普及員は1人で、篠崎さんは彼女をC/Pとしながら、稲作振

興をさまざまな形で支えた。

グループ単位での支援

C/Pと検討したうえで、篠崎さんは次のようなステップで稲作の振興に取り組んだ。

- ① 対象農家の発掘 農業普及員たちから、それぞれが担当する地域で稲作に興味がありそうな農家を紹介してもらうなどして、活動の対象者を発掘する。
- ② グループ結成の呼びかけ 発掘した活動対象者にグループの結成を促す。生産局では、知識・機材の共有や、多くの手間がかかる田植えなどの時期に作業の助け合いができるといった利点を考え、同じコミュニティの農家たちでグループを結成することを推奨していた。その手段の一つとして、20人以上の農家で結成することができたグループには、WITA9の種もみを1人あたり1キログラム

配布し、収穫後同じ量の種もみを返してもらうという仕組みを設けていた。

③ ワークショップの実施 活動対象者が所属する農家グループに、WITA9の特徴や移植栽培の方法を伝えるワークショップを実施する。講師は主にC/Pが務める。

④ 共同栽培の支援 ワークショップに参加した農家グループに、メンバーの土地などを使ってWITA9の移植栽培を共同で行ってもらう。「実習」の位置付けであり、栽培中は篠崎さんが折を見て訪問し、必要なアドバイスを行う。

⑤ 個人栽培の支援 共同栽培を行った次のシーズンには、各農家にそれぞれの田を使って個人での栽培に挑戦してもらう。その栽培中も篠崎さんが折を見て訪問し、必要なアドバイスをを行う。

ウガンダで稲作が可能な時期は、3〜5月の大雨期と9〜11月の小雨期の2回。17年10



① ワークショップを受けた農家グループが最初に行う共同栽培の田植えの様子。篠崎さん(左から2人目は、自身のアドバイスに対して聞く耳を持ってもらえるよう、巡回時には積極的に農作業に加わった) ② 栽培がうまくいった農家の田で行った見学会「フィールド・デー」 ③ 新規の農家グループを対象にワークショップを行うC/P

派遣国の横顔

任地ひとロメモ (カムリ県)



降水量が多く、トウモロコシ、調理用バナナ、コメ、コーヒーなどさまざまな作物が栽培されている県の農村部の風景



右: 代表的な主食であるポシヨに煮込み野菜を添えた農家の典型的なワンプレート料理
左: 農家のキッチンで現地の料理を教わる篠崎さん(右)

リーダー役の農家を育成

月に着任した篠崎さんは任期中、3回の稲作シーズンを利用して延べ約40の農家グループを対象に活動した。

特に困難が大きかったのは④⑤のステップだ。移植栽培は、田植えや畝づくりなど、直播栽培にはない手間がかかる。そのため、③で伝えた「苗を何本ずつ、どれくらいの間隔で植えるか」「草むしりは何回、どのタイミングでやらなければならないか」といった要領を守らない農家もいた。その是正を篠崎さんが促しても、にわかには必要性を理解してもらえないことがあったのだ。そうした問題の解決に有効だったのは、栽培がうまくいった農家の田で収穫時に周辺の農家を集めて行った「フィールド・デー」と称する見学会だ。実り豊かな田の実物を前に、どのように栽培すればこれだけの収穫が得られるのかを説明すれば、手間の意義を納得してもらいやすかった。フィールド・デーには、まだ稲作を行っていない農家も招待。興味を持った農家には、

WITA9の種もみを1キログラム提供した。

活動対象とした農家の多くは従来、ほかの作物も栽培していたが、WITA9で高い収量が見込めることを確信し、田を買い足してコメをメインに栽培する農家も出てきた。そうしたなかで篠崎さんが課題だと考えたのは、自身の任期終了後も稲作振興が継続することだ。C/Pは担当する地域で稲作以外の作物の振興も行わなければならないが、他の地域での活動にそれほど労力を割く余裕はない。一方、ほかの農業普及員たちは、前述の③のワークショップに同席して知識を得ていたが、「専門外」であるため、稲作に関する仕事に力を入れる意欲を持ってもらうことは難しかった。そこで篠崎さんが自身の活動の引き継ぎ手になってもらうと考えたのは、稲作に特に意欲的に取り組むようになった農家たちだ。ふさわしい人材だと判断した人には、他の農家グループで行う④のワークショップに招き、C/Pと共に講師役を務めてもらった。そうした役割を積極的に務めてくれた農家は約10人。彼らの以後のリーダーシップに期待しながら、篠崎さんは帰国の途に就いた。



もり あやこ
森 亜矢子さん

(PCインストラクター・2017年度2次隊)

PROFILE

1982年生まれ、徳島県出身。日本の大学で建築デザインを、米国の大学でウェブデザインを学んだ後、ニューヨーク市で日系情報誌の制作に従事。2017年9月に青年海外協力隊員としてウガンダに赴任。19年9月に帰国。現在は国連平和大学の修士課程で平和紛争学を研究中。

活動概要

- チェイゾーバ女子セカンダリースクール(ブシエ二県)に配属され、主に以下の活動に従事。
- ICT授業での指導
- コンピュータ室の管理支援
- 難民定住地でのパソコン教室の実施

パソコンに触れる機会が、少ない生徒たちを相手に、パソコン操作の実技を担当

十分な台数のパソコンが揃い、ICT教育の環境が整った中等教育機関でICTの実技授業を担当した森さん。活動の課題は、授業外でパソコンに触れる機会が少ない生徒たちに、いかにしてスキル習得への意欲を持ってもらうかだった。

森さんが配属されたのは、ウガンダ西部地域に位置するブシエ二県のチェイゾーバ女子セカンダリースクール。中学校の4学年と高校の2学年を合わせた計6学年がある、公立の中等教育機関だ。全寮制の女子校で、当時の生徒数は約1000人。

配属校ではICT授業が中学2年までは必修教科として、中学3年以降は選択教科として時間割に組み込まれており、3人の教員が専任として配置されていた。森さんは彼らと共に一教員として授業を実施。着任の約3カ月後に始まった2018年度は中学2年生と高校2年生、翌年度は高校1、2年生の実技の授業を受け持った。1学年のクラス数は254。1コマ90分のICT授業が中学2年生には各クラス週2コマずつ、高校生には各クラス週3コマずつあった。

「自立」の手段であることを伝える

配属校は、国内でもICT教育の環境が比較的整っている学校だった。ICT授業で使う教室に置かれていたパソコンは、Windowsを搭載したデスクトップ型が80台ほど。多くのクラスの授業で1人1台ずつ行き渡る台数だ。しかも、国内の他校に導入されているパソコンで例が多かったシンククライアントではなかったため、各パソコンはストレスなく操作できた。パソコンの管理に専従する技術者も置かれており、彼がウイルス感染などパソコンに不具合が発生するとすぐに対処していたため、ほぼすべてのパソコンが常に使える状態に保たれていた。

中等教育におけるICT授業についてはウガンダ政府がシラバスを定めており、実技はパソコンの基本操作とMicrosoft Officeのソフトの習得がメイン。森さんはシラバスに従い、いずれの学年でもWord、Powerpointを教え、高校2年生ではそれらに加えてPublisherも教えた。同国では中学

問題を、入学前にパソコンに触れた経験がある生徒はまれであり、かつ入学後も生徒が授業以外の場でパソコンに触れるチャンスが少ないため、スキルの習得がなかなか進まず、ひいては授業への意欲を持ってもらうのが難

を得ているプログラマーがいる」といった話は、生徒たちも興味深そうに耳を傾けてきた。

「選択と集中」で意欲を刺激

生徒たちのパソコンに対する興味を引き出すために試みたことのもう一つは、生徒たちの「負担感」を減らすことだ。例えば、授業では「完璧を求めない」と口ずすべく伝えるようにした。中学校と高校の卒業時の国家試験では、主要教科は得点を0〜6点のスコアに、ICTを含むその他の教科は0点か1点のスコアに換算し、全教科のスコアの合計点で合否が決められる。ICTで1点のスコアが付くのは、元の点数が60点以上の場合。そこで森さんは、無理をして100点を狙おうとするのではなく、まずは60点を超えることを目指して勉強しようと生徒たちに呼びかけ、それに応じて授業で取り組ませる課題も難易度を

下げたものに絞った。そのうえで、スキルの習得が早く、もっと高度なことを学びたいという生徒がいれば、プラスアルファの課題を与え、その指導をした。すると、パソコンが苦手な生徒も得意な生徒も、与えられる目標が自分に合ったレベルのものであることから、スキルの習得に意欲を見せるようになった。さらに森さんは、与えた課題を早く終えた生徒には、残りの時間でSNSやゲームを楽しむことも認めてみた。配属校では、補講を含めると朝5時から夜10時まで授業が行われており、「短い時間で集中して勉強しよう」という意識を生徒たちが持ちづらいと思われたことから、それを育てようと考えて取り入れたものだ。やはりこの工夫も効果があり、課題に取り組んでいる生徒たちの顔つきが、集中していることがうかがえるものへと変わっていった。



森さんが行ったICTの実技の授業で課題に取り組む生徒たち



上:同僚教員(中央)が受信アンテナを設置する場でインターネットについて説明の様子。固定のブロードバンドは無線で利用できるWiMAXのサービスを利用するのがウガンダでは主流で、配属校もそれを利用。校内の端末がWi-Fiでインターネットを利用できるようにしていた
下:配属校で週に数回開かれる朝会の様子

しい点だった。スマートフォンを持ち、その扱いに慣れている生徒はいたが、むしろそれが弊害となり、パソコンが必要な「シャットダウン」の手順を踏むことが一向に身に付かないといったケースも少なくなかった。

そうしたなか、生徒たちのパソコンへの興味を高めるために森さんが試みたことの一つは、「パソコンが使えるようになれば人生の可能性が広がる」と実感してもらうための策だった。配属校では森さんが着任した当時から、生徒たちの「自立」への意識を高めるような教育がなされていた。例えば集会の際などに、教員が生徒たちに「若いときに妊娠するのは良くない。自分の力で生きていけるよう、まずはキャリアを積むことが大切だ」と説く。森さんはICT授業を担当している立場として、パソコンのスキルが自立の有効な手段であることを生徒たちに伝えたいと考えた。体力など男女間の生物学的な差に関係なく、女性も男性と同じようなパフォーマンスを発揮

できるスキルだからだ。

森さんが着目したのは、女性を対象にプログラミングの技術を無料で教える教室を開催しているNGOの存在だ。インターネットで探すと、そうしたNGOが国内にいくつもあることがわかった。そこで森さんは、そうした教室のなかのいくつかに参加。すると、講師を務めていた女性の一人は、ストーリーテリングとして育ったが、恋人に教わってプログラミングに挑戦してみたところ向いていることがわかり、プログラマーとして働くようになったとのことだった。森さんは彼女を配属校に招くか、生徒たちを彼女の教室に連れていくか検討したが、予算の都合で断念。そこで、彼女を含め、ウガンダでプログラマーとして活躍している女性たちの話を集めては、担当する授業のなかで生徒たちに伝えることにした。すると、「インターネットによって外国から仕事を受注することができるようになり、ウガンダにもそういうやり方で高い収入

任地ひとロメモ 〈ブシエ二県〉



ブシエ二県は標高が1500〜2000メートルの高地。緑豊かで牛の飼育が盛んな「牛の回廊」と呼ばれる地域に位置する



右:布を買い、テイラーに服を仕立ててもらうのが一般的
左:ウガンダではバッタがよく食される。炒めて塩で味付けすると、桜えびに似た美味になる

* シンククライアント…クライアント端末の機能を最小限にし、サーバでデータの管理や処理をするシステム。

現地職員



ヨランダ・カンボス・グアルダミノ
Yolanda Campos
Guardamino

1967年生まれ、ペルー・リマ市出身。2005年からJICAの技術協力プロジェクトなどにローカル・コンサルタントやプログラム・オフィサーとして従事。16年からJICAペルー事務所JICAボランティア事業のコーディネーターなどを務める。

Q. 協力隊員に共通する特徴だと感じていることは？

自分が必要とされているときにはいつでも力になるようにと、積極性が高い方々だと思います。ほかにも、最良の解決策を見つけ出すために想像力を働かせ、創造性を発揮する点、自分が置かれている状況を客観的に分析する力を持つ点、チームとして働く方法をわかまえている点などが、彼らに共通する特徴だと思います。

Q. 協力隊員に関する印象深いエピソードは？

新型コロナウイルスの感染拡大により、2020年3月に全協力隊員が帰国したことです。空路・陸路ともに制限があったなか、協力隊員たちの配属先の支援、あるいは日本大使館、ペルーの外務省や内務省、警察などとの密な連携により、15の地域に分散していた協力隊員たちを無事に移動・帰国させることができました。

Q. 協力隊員にとって重要な心構えは？

日々の活動とそこで起こる困難に対し、誠実さと生産性の両方を求めて向き合うためには、ぶれずに粘り強さを保つ姿勢が必要となります。活動の成果がすぐに現れないことも少なくないですが、それでも活動は持続しなければなりません。

Q. 協力隊員へのメッセージをお願いします。

ボランティアとは、自らの選択によって、つまり強制されていないのに、他者のために活動する人です。ボランティア活動とは、選択する・しないが自由な1つの生き方であり、それを選ぶのは、人間理解への真剣さがあるゆえではないかと思います。ペルーのように開発の途上にある国の現状は、日本とはあらゆる面で異なります。そのため、協力隊員はまずはそれぞれの任地の生活環境に適応してください。とは言え、心配は無用です。JICAペルー事務所のスタッフは最善を尽くし、協力隊員のペルーで過ごす日々がより良いものになるよう努めています。

01_中南米

ペルー事務所からのエール



上：協力隊の派遣開始40周年の記念ロゴ
下：JICAボランティア事業にかかわるJICAペルー事務所のスタッフたち

JICAペルー事務所の人員体制

- 企画調査員(ボランティア事業):3人
- 現地職員:21人
- その他:9人



ペルーの協力隊員が利用できる共有財産

隊員連絡所はなく、事務所内に協力隊員が利用できるスペースを設置。協力隊員が作成した教材などの電子データを格納したパソコン、語学学習や各種専門分野に関する参考書などを並べた本棚を置いている。

JICA 在外事務所からのエール

特集

to JICA Volunteers

企画調査員(ボランティア事業)



ながたけみ な
永竹未奈

1979年生まれ、東京都出身。大学院修了後、青年海外協力隊に参加(ニカラグア・青少年活動・2005年度1次隊)。短期派遣の青年海外協力隊員としてコロンビアで活動した後、都内の福祉関連施設に社会福祉士として7年半勤務。2018年1月より現職。

Q. 主な担当業務は？

社会サービス分野、観光開発分野、日系社会との連携分野の協力隊員のサポートのほか、協力隊員の着任時の対応や広報に関する業務を担当しています。2020年はペルーへの協力隊派遣が開始されてから40周年の年だったため、協力隊員の配属先をはじめとするペルーの方々、協力隊経験者や派遣中の協力隊員の協力を得ながら、SNSを駆使してさまざまな広報活動を行いました。

Q. ペルーへの協力隊派遣の特徴は？

ペルーはアンデス文明の遺跡に代表される文化遺産の宝庫であり、各地の博物館で協力隊員が所蔵品の撮影や展示、来館者への教育などに協力しています。また、雄大な自然という観光資源もあり、観光客誘致の支援を行う協力隊員や、自然保護区の環境保全を支援する協力隊員も派遣されています。観光はペルーの基幹産業であり、観光を通じた地域振興にかかわる活動も少なくありません。

Q. 印象に残っている活動例をお教えてください。

どの協力隊員の活動も感心することしきりで、1人の活動を選ぶ

JICA海外協力隊員たちは活動や生活でどのような困難に直面し、どのように乗り越えているのか。それを現地で見つづかしているのが、派遣国に置かれているJICA在外事務所だ。そこで本特集では、協力隊員の生活や活動のサポートを担当する企画調査員(ボランティア事業)や現地職員、JICA関係者の健康管理に関する業務を担当する在外健康管理員(※)という、JICA在外事務所協力隊員にかかわるスタッフたちに、協力隊員に向けたアドバイスやエールを寄せてもらった。

※不在の国もあります。

ことは難しいため、協力隊員たちが2018年から毎年1、2回、帰国研修員同窓会と共催している日本文化紹介イベントをあげたいと思います。2019年はペルーへの日本人の移住が始まってから120周年の年だったため、国内各地で関連イベントを開催したのですが、楽器の演奏や着付け、茶道など普段の活動からはうかがい知れない協力隊員たちの特技や魅力を知ることができました。

Q. 赴任までに準備しておくべきだと思うことは？

プレゼン資料を作成するためのソフトを使いこなせるようになっておくことです。視覚的に印象的な資料は、配属先の方々の関心もひきやすいと思います。

Q. 活動ではどのような姿勢が重要でしょうか。

活動開始時は、まずは先入観を捨てて現状を正しく把握、認識しようとする姿勢が重要であり、その後は、変化する環境を柔軟に受け止める心の余裕が必要かと思います。

Q. 協力隊員へのメッセージをお願いします。

ペルーで充実した活動・生活ができるよう私たちも側面支援していきますので、一緒に励みましょう。

在外健康管理員



おがわ あゆみ
小川 歩

1978年生まれ、東京都出身。大学で看護師と保健師の免許を取得。看護師として大学病院などに勤務した後、青年海外協力隊に参加（ベネズエラ・看護師・2009年度2次隊）。任期終了後よりJICA在外健康管理員業務に従事し、2021年2月より現職。

Q. 主な担当業務は？

JICAの事業で派遣されている方々の健康管理、現地の医療事情や流行疾患などの調査・把握、傷病者発生時の対応です。

Q. 健康管理に関連する現地の事情をお教えてください。

同じケニアでも地域によって注意すべき疾患や健康管理の方法が異なってくるのが特徴だと思います。都市部と村落部で違いがあるのはもちろんですが、マラリアやデング熱などの熱帯感染症、スナノミ症や住血吸虫症などの皮膚トラブルが流行している地域もあれば、首都ナイロビのように標高が高く熱帯感染症などのリスクは低いものの、標高による影響で「疲れやすい」「息切れがする」「胃もたれする」などの体調不良があり得る地域もあります。

Q. 健康管理に関して赴任前にやっておくべきことは？

時間の余裕を持って歯科検診を受け、虫歯があった場合は治療を終えてから赴任することをお勧めします。

Q. 健康管理に関して派遣中に必要な心構えは？

自分の健康を過信しないことです。周りの人が大丈夫だから自分も大丈夫であるとは限りません。自分の健康は自分で守ることを心がけてください。

Q. 健康管理に関するエピソードで印象的だったのは？

野菜が少なく肉が中心の食生活が一般的な他国の協力隊員の話です。派遣中の健康診断で体重やコレステロール値が上昇していたのですが、「現地の人が自分のためにつくってくれた料理であり、この2年間しか食べられない料理。一緒に食事をして交流する時間のほうが大切だ」と割り切っていました。後々の健康の悪化につながらない範囲であれば、これも1つの選択だと思います。

Q. 協力隊員へのメッセージをお願いします。

コロナ禍のなかでの赴任は不安も大きいかと思います。十分な感染予防対策を行い、これまで以上に健康管理に留意する必要はありますが、「笑う門には福来る」です。たくさん笑顔をお待ちしております。

現地職員



ドリス・ワイティラ・ンジエヒア
Doris Waithira Njihia

ケニア・ナイロビ市出身。2004年から保健・医療や環境などさまざまな分野のJICA事業に従事。08年からJICAケニア事務所JICAボランティア事業の業務を担当。

Q. 協力隊員に共通する特徴だと感じていることは？

協力隊員の方々は、ボランティア活動への強い熱意を持ち、村落部に配属される協力隊員の場合はそうした地域で活動することに前向きな姿勢を持って赴任します。そのため、任地のコミュニティや配属先に容易に溶け込みます。それは、彼らが現地の文化、あるいは料理をはじめとする現地の生活を学ぼうとする姿勢を持って赴任するからなのだと思います。

Q. 協力隊員に関する印象深いエピソードは？

数年前、それまでケニアで馴染みのなかった「指圧」を職業訓練校に通う視覚障害者に協力隊員が指導しました。指圧は、リラクゼーションだけでなく、腰痛、倦怠感、頭痛など体のさまざまな問題の解消に効果があります。しかも、服を着たままで施術を受けることができ、道具もベッドだけで済みます。その協力隊員は、視覚障害者が指圧をする施設を開設したり、公立の病院で指圧師として雇用されたりして自活できるようになることを目指していました。指圧は現在、ケニアで知れ渡り、その効果が認識されるようになりました。

Q. 協力隊員にとって重要な心構えは？

協力隊員の方々には、現地の人は皆さんを歓迎し、皆さんの活動を必要とし、評価していただきたいと思います。また、活動や生活で「安心感」を持っていただきたいと思います。配属先のサポートがあって初めて協力隊員は最良のパフォーマンスを発揮し、確かな成果を残すことができるのです。

Q. 協力隊員へのメッセージをお願いします。

ケニアの人々はフレンドリーです。現地の人々と深くかかわり、美しい風景や雄大な自然も楽しみつつ、協力隊活動に挑戦してもらえればと思います。もちろん、もっとも重要なのは、ケニア人がより必要としている技術を伝えていただくことです。

02_ アフリカ

ケニア事務所からのエール



左：JICAケニア事務所が入るビル
下：JICAケニア事務所の中に設けられたボランティアルーム



JICAケニア事務所の人員体制

- 企画調査員(ボランティア事業)：4人
- 在外健康管理員：1人
- 現地職員：30人
- その他：32人



ケニアの協力隊員が利用できる共有財産

新型コロナウイルスの感染予防のため、隊員連絡所の利用は原則禁止中。事務所に協力隊員が利用できるパソコンを設置しているボランティアルームを設け、過去の協力隊員の活動報告書などが閲覧できるようにしてある。

企画調査員(ボランティア事業)



しらかわともひさ
白川智久

1976年生まれ、北海道出身。大学卒業後、民間企業勤務を経て青年海外協力隊に参加（ボツワナ・行政サービス・2015年度4次隊）。民間企業のミャンマー駐在員として教育分野の業務に従事した後、2020年12月より現職。

Q. 主な担当業務は？

環境分野の協力隊員のサポートのほか、協力隊員の帰国手続きや語学フォローアップに関する業務を担当しています。

Q. ケニアへの協力隊派遣の特徴は？

主に計画・行政、農林水産、人的資源、保健・医療などの分野の協力隊員が、首都ナイロビ市の周辺やケニア西部を中心に派遣されています。

Q. 印象に残っている活動例をお教えてください。

私の着任がコロナ禍に入ってからということもあるのですが、一時帰国中のケニア隊員が日本国内で地域の課題の解決に積極的に取り組みながら、協力隊活動や語学に関する自己研鑽に励んでいることが強く印象に残っています。

Q. 赴任までに準備しておくべきだと思うことは？

私自身が協力隊員として赴任する際にアドバイスされたことなのですが、必ず複数の活動プランを準備したうえで赴任したほうが良いと思います。それにより、活動先の状況に応じて実際に取り組む活動を柔軟に選択することが可能になります。

Q. 活動ではどのような姿勢が重要でしょうか。

コロナ禍に入る前と後とでは、ケニアにおける協力隊員の活動や生活の状況が大きく変化しています。例えば、新型コロナウイルスの感染予防のため、現在は協力隊員が公共の乗り合いバスを利用することを禁止しています。そうした変化に柔軟に対応し、もし想定外の状況に置かれたとしても、自分なりの活動や生活をつくりあげていくという意気込みが必要になっていると感じています。

Q. 協力隊員へのメッセージをお願いします。

withコロナ時代の協力隊活動には、以前にも増してさまざまな工夫が求められます。そのなかで、ケニアに赴任された協力隊員の方々の活動が少しでも充実したものになるよう、精一杯サポートさせていただきます。皆さんとケニアでお会いできることを楽しみにしております。

03_ アジア

ベトナム事務所
からのエール



上: JICAベトナム事務所の室内。
コロナ禍でスタッフは在宅勤務となっている
下: JICAベトナム事務所が入るビル

JICAベトナム事務所の
人員体制

- 企画調査員(ボランティア事業): 3人
- 在外健康管理員: 1人
- 現地職員: 57人
- その他: 27人



ベトナムの協力隊員が利用できる共有財産

隊員連絡所はない。事務所の一角に協力隊員向けの本棚を置き、小説やビジネス書を中心とする本を並べている。

在外健康管理員



おおぼりゆ
大場利優

静岡県出身。短期大学で正看護師の免許を取得し、助産師学校で助産師の免許を取得。助産師として大学病院に勤務した後、青年海外協力隊に参加(ネパール・助産師・1996年度2次隊)。その後、JICA本部の健康管理室に6年間勤務。スリランカ、フィリピン、タイのJICA在外健康管理員を経て、2018年10月より現職。

Q. 主な担当業務は?

JICA事業で派遣される方々の健康管理支援です。在外事務所ではJICA職員、専門家、協力隊員などの日常の健康相談や途上国における疾病の予防対策、医療情報の収集・発信などの啓発活動、病気や事故などの緊急時の対応などに携わっています。

Q. 健康管理に関連する現地の事情をお教えてください。

蚊が媒介するデング熱やマラリアなどの感染症は年中発生します。防蚊対策は特に必要です。交通量が多くて大気汚染が深刻な都市部では、交通事故や呼吸器の病気に気を付ける必要があります。近年、大きな都市では日本人の医師が勤務するクリニックや歯科医院も増えているため、軽微な病気に関しては気軽に受診できるようになってきています。

Q. 健康管理に関して赴任前にやっておくべきことは?

厳しい環境でも耐えられるだけの体力や精神力を養い、自分の健康状態を自分で把握しながら自己管理できるようになってください。派遣中は趣味などで気分転換することも重要なので、ベトナムで楽しめる娯楽品などを持参すると良いです。また、協力隊員の傷病でもっとも多いのは歯科疾患です。赴任前に歯科検診を受け、必要な場合は治療を完了してから赴任してください。女性の場合は、派遣中の一時帰国が叶わない場合に備えて、婦人科健診を受けてから赴任すると良いです。

Q. 健康管理に関して派遣中に必要な心構えは?

ベトナムの文化や食事などは日本人になじみやすく、ベトナム人は親切で家族のように接してくれるので、生活はしやすいと思います。しかし、ストレスを感じたり疲れが出たりすることはあると思いますので、そういう場合は1人で悩まず、早めに在外健康管理員に相談・報告することを心がけてください。

Q. 協力隊員へのメッセージをお願いします。

ベトナムはおいしい食べ物もたくさんあり、治安も比較的良く、住みやすい国ですので、楽しみに赴任してください。新型コロナウイルス感染症が流行するなかでの赴任は心配な部分もあるかと思いますが、皆さんが安全かつ健康に過ごせるよう全力でバックアップしますので、安心して赴任してください。

現地職員



ゲン・ティ・グー
Nguyen Thi Ngu

1981年生まれ、ベトナム・ハノイ市出身。大学卒業後、2004年からJICAベトナム事務所に勤務。

Q. 主な担当業務をお教えてください。

日本語教育、コミュニティ開発、観光、幼児教育などの分野につき、企画調査員(ボランティア事業)とペアを組んでサポートを行うほか、現地語学訓練や語学のフォローアップ研修、帰国の調整などに関する業務を担当しています。

Q. 協力隊員に共通する特徴だと感じていることは?

赴任時には「ベトナムを助けたい」という気持ちが強かったけれども、家族を大切にできる姿勢や向上心など、ベトナムの人々から多くのことを学んだという感想を持って任期を終える協力隊員が多いように思います。また、任期終了後もベトナムに戻ってベトナムの発展のために活動している方や、日本でベトナム人留学生やベトナム人技能実習生を支援する仕事に就いている方も多く印象です。

Q. 協力隊員に関する印象深いエピソードは?

UNESCOのアジア太平洋文化遺産保存賞を受賞した村では、伝統家屋などの文化財の修復工事を支援する建築隊員と、住民の生活改善や観光開発を支援するコミュニティ開発隊員をペアで派遣してきましたが、彼らの取り組みは好評でした。コラボを図り、村の伝統を保存しながら、生活の問題の解決に取り組んでくれました。

Q. 協力隊員の活動で重要だと考えていることは?

ベトナム人にとって「コミュニケーション」や「信頼関係」は非常に重要です。何でも言い合える関係を目指すことで、コミュニケーションが進み、信頼関係が生まれます。また、ベトナム人はコミュニケーションをする相手の表情をよく見ています。そのため、あえて笑顔をつくって会話し、相手に親近感を持たせることに努めるのが良いと思います。

Q. 協力隊員へのメッセージをお願いします。

日本の技術や知識でベトナムにないものは多く、それらを共有してほしいと求められるケースが多くあります。協力隊員がそれらを伝える際、「ベトナム人と一緒によりよい回答を見つけよう」という気持ちがなければ受け入れてもらえないと思います。何があっても、「理解しよう! 調和しよう!」と心がけてください!

企画調査員(ボランティア事業)



ながせ ひかる
永瀬 光

1975年生まれ、島根県出身。地方公務員を経て青年海外協力隊に参加(ケニア村落開発普及員2013年度1次隊)。その後、二本松青年海外協力隊訓練所勤務を経て2018年8月より現職。

Q. 主な担当業務は?

日本語教育分野や観光分野などの協力隊員のサポートのほか、協力隊員の受け入れと現地語学訓練、帰国手続きなどに関する業務を担当しています。

Q. ベトナムの活動環境の特徴は?

ベトナムは日本と政治的・経済的な結びつきが強いため、協力隊員の活動も日本とかわるものが少なくありません。日本語教育がその代表例ですが、ほかに日本人の顧客を想定した観光開発などの活動も行われています。任期終了後もベトナムとかわり続ける協力隊員が多く、日本との結びつきはさらに強くなっていくと期待できるので、協力隊経験をその後のキャリアに生かすチャンスもさらに広がっていくのではないのでしょうか。

Q. 印象に残っている活動例をお教えてください。

観光隊員と日本語教育隊員が連携し、大学の日本語学科で13回にわたる観光日本語特別講座を開催したことがありました。日本語観光ガイドを育成する目的の活動であり、地元経済と学生の両者に有益だったと関係者に好評でした。

Q. 赴任までに準備しておくべきだと思うことは?

ベトナムの方々はカラオケが大好きなようで、日曜日の昼ごろに住宅街を散歩していると、あちこちの家から歌声が聞こえてきます。協力隊員も得意の一曲をつくっておくと良いと思います。

Q. 活動ではどのような姿勢が重要でしょうか。

結婚式や葬式など、協力隊員はさまざまな行事に誘われることが数多くあるはず。とりあえず何でも参加してみてください。日本人観光客や大都市に住む日本人駐在員には知ることができない「リアル」なベトナムを垣間見る機会になるはず。

Q. 協力隊員へのメッセージをお願いします。

皆さんが今お持ちのベトナムに関する知識やイメージが、協力隊員として過ごした後にどう変わるのかが楽しみです。2年の間で、「ベトナムに行く」ではなく「ベトナムに戻る」と表現するのが自然なほどこちらの生活になじみ、何年たっても再会を喜んでくれる友人・知人が多くできることでしょ。

在外健康管理員



まつだ みほ
松田美穂

看護師として大学病院の脳神経外科病棟、ICU、CCU、熱傷センターなどに勤務した後、青年海外協力隊に参加（ベトナム・看護師・2012年度3次隊）。看護師として大学病院に勤務した後、大学院で熱帯医学を学ぶ。その後、NGOのスタッフとしてアフリカと中東で救急医療に関するプロジェクトに従事。2019年1月より現職。

Q. 主な担当業務は？

JICA事業で派遣される方々の健康管理、現地の医療情報を収集して事実との整合性をアセスメントし、病気や事故などの緊急時の対応体制を整備すること、病気や事故が発生した際の現地医療機関との調整などを担当しています。

Q. 健康管理に関連する現地の事情をお教えてください。

マラリアやデング熱が蔓延しているため、防蚊対策は必須です。また、赤痢などの下痢症も見られるため、食べ物の加熱や手洗いも大切です。新型コロナウイルス感染症に関しては、経路が追えない市中感染が継続しているため、公共の場での適切なマスク着用とソーシャルディスタンスを徹底し、それができない環境には行かないなどの自己防衛が欠かせません。

Q. 健康管理に関して赴任前にやっておくべきことは？

体温計、常備薬、パーソナルヘルスレコード、共済会ハンドブックを忘れずに持参していただければと思います。

Q. 健康管理に関して派遣中に必要な心構えは？

新型コロナウイルス感染症に関しては、現地の人々の意識の低さに赴任当初は驚かれると思います。しかし、人は時間とともに同化する傾向がありますので、定期的にご自身の感染予防対策を振り返ることが大切だと思います。

Q. 健康管理に関するエピソードで印象的だったのは？

ココナツを常にストックしておき、脱水予防に努めていた協力隊員がいました。パプアニューギニアで豊富なココナツは、ミネラルが豊富な天然のスポーツドリンクであり、現地の状況に即した工夫だと感心しました。

Q. 隊員へのメッセージをお願いします。

パプアニューギニアはインターネットの接続が不安定です。治安上の行動制限もあるので、電子書籍や動画などは赴任前にダウンロードし、気分転換の方法を広げておくことをお勧めします。

現地職員



プリシラ・カヴァナ
Priscilla Kavana

1984年生まれ、パプアニューギニア・ポートモレスビー市出身。2016年にJICAパプアニューギニア事務所に入職し、18年から企画調査員（ボランティア事業）のサポート業務に従事。主に協力隊員の配属先とJICAの間の調整役を務めている。

Q. 協力隊員に共通する特徴だと感じていることは？

「挑戦者」だと感じています。リスクを恐れずに好んで挑戦する、あるいは任地のコミュニティに入り込み、2年間にわたってその人々のためになることに取り組めるだけの強い人間力を持っている方々だと思います。

Q. 協力隊員に関する印象深いエピソードは？

パプアニューギニアでは、小学校の卒業時に中学校への進学の資格を得る国家試験があります。算数の平均点が低いという課題を抱えていたある小学校で、協力隊員が高学年の算数の授業を担当したところ、国家試験の成績が目覚ましく向上したことがありました。

Q. 協力隊員の活動で重要だと考えていることは？

協力隊員たちは、現地の言語を学び、現地の料理を食べ、現地のコミュニティの一員として暮らします。他の文化、他の生活習慣を学ぶという広い心を持って赴任していただきたいと思っています。

Q. 協力隊員へのメッセージをお願いします。

協力隊に参加されること自体、皆さんにとっては新たな発見や自分自身の成長が得られる大きな一歩だと思います。慣れ親しんできた「コンフォート・ゾーン」から飛び出し、未知の世界に飛び込む経験にほかならないからです。「成長」と「人生の転換」の2つをもたらす挑戦であり、機会であると思います。お伝えしたいたった1つのことは、異文化を経験する機会をぜひ最大限に実りあるものとしてもらいたいということです。日本の生活と任地の生活がどのような点で異なるのか、任地に変化をもたらす役目で赴任した自分は何の発展に貢献できたのか。任期を終えたら、それらを振り返ってもらいたいです。心を開いて我が国にいらしてください。

04_ 大洋州

パプアニューギニア事務所からのエール



上：JICAパプアニューギニア事務所が入るビル
下：JICAパプアニューギニア事務所のスタッフ

JICAパプアニューギニア事務所の人員体制

- 企画調査員（ボランティア事業）：1人
- 在外健康管理員：1人
- 現地職員：11人
- その他：7人



パプアニューギニアの協力隊員が利用できる共有財産

隊員連絡所と事務所の図書室には、農林水産や教育、ITなどこれまで協力隊員が活動してきた分野の専門書や、協力隊の各種分科会が作成してきたテキストや教材などを保管。

企画調査員（ボランティア事業）



たかもり やすし
高森 靖

1983年生まれ、山口県出身。大学卒業後、青年海外協力隊に参加（スリランカ・環境教育・2009年度4次隊）。帰国後、外国人技能実習生の研修センターや監理団体に勤務するかたわら、青年海外協力隊大阪府OB・OG会の活動に参加。2019年3月より現職。

Q. 主な担当業務は？

保健・医療分野や日本語教育分野の協力隊員のサポートのほか、協力隊員の帰国手続き、バイクの貸与・管理、広報などに関する業務も担当しています。

Q. パプアニューギニアの活動環境の特徴は？

協力隊員が配属される行政機関は慢性的に人材不足であり、常に即戦力が求められます。そのため、同僚に自分の技術や経験などを共有する機会は、工夫してつくらなければなりません。一方で、先輩隊員たちがこれまでの活動で獲得した信頼により、着任したばかりでもどんどん仕事を任せてくれる配属先が多いため、非常に活動がやりやすい環境だと思います。

Q. 印象に残っている活動例をお教えてください。

病院で活動した理学療法士隊員が、活動のかたわらで同僚と共に配属先の理学療法に関するデータを収集・分析し、計6本の論文にまとめて発表したことがありました。それまで関係者が漠然と感じていたことが「統計」により見える化されたことで、彼らに非常に大きな影響を与えました。

Q. 赴任までに準備しておくべきだと思うことは？

地方都市では外食の場がほとんどなく、これまでの協力隊員たちは食生活に苦労していました。そのため、つくれる料理のバラエティを増やしてから赴任することが、2年間の活動や生活をより充実させるために有益だと思います。

Q. 活動ではどのような姿勢が重要でしょうか。

800以上の部族があると言われ、それぞれ文化や考え方が異なります。協力隊員の配属先にはさまざまな部族の職員がいると思います。彼らとの関係を築くうえで、まずは相手の部族のことを学ばせてもらうというのが良いと思います。

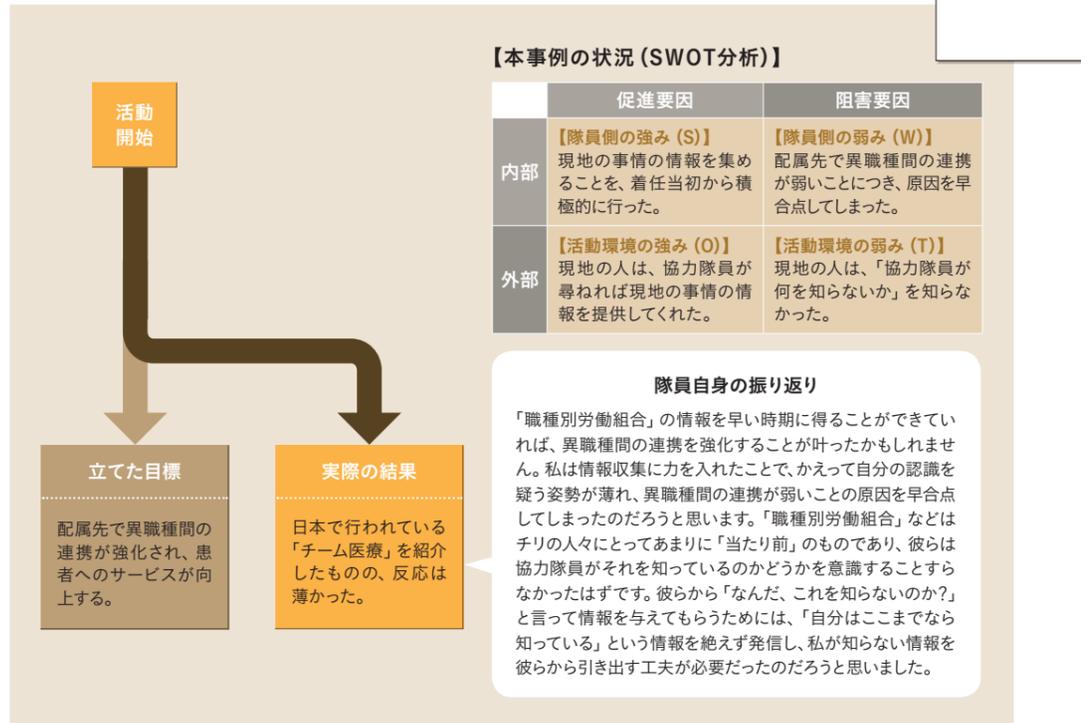
Q. 協力隊員へのメッセージをお願いします。

自分の目で現地を見て、大自然が残るパプアニューギニアを感じてもらえればと思います。健康第一・安全第一で無事に2年間活動できるよう、事務所スタッフ一同応援していきます。

“失敗”から 学ぶ #189



事例整理



他隊員の分析

現地の友人を認識の誤りのチェック役に

私も着任早々、同僚たちには助け合いながら仕事にあたる姿勢がないと感じました。その重要性を訴えても受け入れてもらえないことから、当初は「怠惰で協調性がない国民性」に原因があると思い込んでいました。その後、配属先外にできた友人に、派遣国の人々はそれまでの社会の体制から、ほかの人の仕事に口や手を出すことはむしろ避けるべきとされてきたことを教わりました。協力隊員が目前の状況の原因について正しく把握するためには、何でも話せる現地の友人をつくり、その人に自分が考えていることをしっかり言葉にして伝え、自分に欠けている情報を指摘してもらう姿勢が有効なのだろうと思いました。

文＝協力隊経験者

●アジア・理学療法士・2015年度派遣

●活動概要：

医療機関に配属され、障害児への運動療法の実施や、その技術に関する同僚や保護者への指導などに取り組んだ。

「外」から見る姿勢

現地について得た認識に誤りや偏りがないかを常に問う姿勢は、私も協力隊経験を通して重要だと感じました。私は配属先の分娩施設をできるだけ広い視野で見なければと考え、配属先を利用する女性の産前産後に家庭訪問をしてどのような生活を送っているかを教えてもらったり、学校を訪問して母子保健についてどのような教育がなされているかを教えてもらったりと、配属先の外に積極的に足を運ぶようにしました。それによって、地域のなかで配属先がどのような存在であるかがつかめるようになり、配属先の事業について同僚たちに聞く耳を持ってもらえるような提案ができるようになったと感じました。

文＝協力隊経験者

●中南米・助産師・2017年度派遣

●活動概要：

分娩施設に配属され、妊産褥婦への保健指導や看護師を対象とする助産技術の研修会の実施などに取り組んだ。

異職種間の連携の強化を訴えたが、 実現には至らなかった

話Ⅱ 中東由子さん(チリ・作業療法士・2017年度2次隊)

私は内科や小児科など7科を擁する医療機関のリハビリ科に配属され、業務の支援に携わった。現場の事情を把握しないまま活動に臨んでも効果が見込めず、時間の浪費となるため、当初から情報収集には力を注いだ。着任するとリハビリ科以外の科を1日1科ずつ回り、見学と聞き取りをさせてもらった。同僚たちに快く対応してもらえよう、「この科ではどの職種の方が何人働いているのですか?」など質問をあらかじめ練っておき、私のスペイン語がストレスにならないよう配慮した。ホストファミリーには、日本の医療保険の仕組みをまとめたプレゼン資料をつくって見せ、チリではどこがどう異なるかを指摘してもらった。

情報収集を通じて見えた配属先の課題の1つに、「異職種間の連携が弱い」というものがあった。医師が糖尿病と診断した患者に対し、看護師は足の壊疽の治療を、理学療法士はリハビリをするが、彼らの間でその患者の情報の共有や相談がなされていないため、「栄養士による栄養指導」の欠落が見逃されていた。私は、異職種間の連携が弱いのは「個人主義の文化」によるものだろうと判断。それが正しい判断なのかを吟味することなく、メリットを感じる協働ならば取り入れてくれるだろうと考え、配属先の全体会議で日本の医療のあり方を紹介する際に「チーム医療」の話題を組み込むなど、意識の変化を促す働きかけをした。しかし、反応はほとんど得られなかった。

☐

異職種間の連携が弱い背景に「職種別労働組合」の存在があることを知ったのは、任期の残りわずかになったころだ。他の医療機関を見学させてもらった際に、配属先では異職種間の連携が弱いという話をしたところ、チリには「作業療法士」や「看護師」など職種ごとに職種別労働組合があることを知らされた。あをすべきだ」と業務量が増える要求を受けると、前者が所属する組合から後者が所属する組合にクレームが行き、要求をした人が咎められるとのことだった。そうした背景があると知っていたら、異職種間の連携の活発化については、組合の関係者を交えて議論するなど他に有効な方法があったはずだが、それを実行するだけの時間の余裕はなかった。



現地の作業療法士会の勉強会に参加する中東さん(奥の左端)



PROFILE

作業療法士として回復期リハビリに5年間、地域リハビリに2年間携わった後、2017年10月に青年海外協力隊員としてチリに赴任。19年10月に帰国。現在は作業療法士として再び地域リハビリに従事。

活動概要

マルセロ・ロベテギ・アダム診療所(オソルノ県オソルノ市)に配属され、主に以下の活動に従事。

- 外来リハビリや訪問リハビリの支援
- 生活習慣病予防の啓発事業の支援



スマホ撮影術をブラッシュアップ②

ナビゲーター = 東海林美紀さん
(ニジュール・エイズ対策・2006年度3次隊)

スマホ撮影術～使用頻度の高い写真の撮り方～

日本の方々に協力隊活動の報告を行う際、自分自身の写真、あるいは派遣国の人や料理の写真などは使う頻度が高いかと思えます。そこで今回は、特にこれらの写真を撮るときに役立つようなスマホカメラによる撮影のポイントを5つご紹介します。

①自撮りでは「手ぶれ」と「フレーム」に注意

自分自身を現地の人や風景と共に撮影するのに手っ取り早いのは「自撮り」。自撮りはスマホを片手で持って腕を伸ばし、シャッターボタンを押すという撮り方が多いかと思いますが、このやり方では手ブレが生じやすくなります。その防止にお勧めなのが「セルフタイマー」の機能です。タイマーをセットしてからスマホを両手で持って腕を伸ばし、モニターで撮影範囲を決めて両手でしっかりカメラを固定すれば、構図もしっかりとした写真が手ブレなく撮れます。この際、手動でピントを合わせる機能(本誌2021年3月号P.23を参照)を使って、しっかりと被写体の顔にピントを合わせましょう。



複数人を撮るときには、両脇にいる人の顔が切れてしまうこともよくあります。それを防ぐためには、横一列に並ぶのをやめ、立ち位置を変えるなどすることが必要です。スマホ用に別売りされている広角レンズ(右写真)は、広い範囲を撮影できるので自撮りで威力を発揮するツールです。

②ここぞというときには、誰かにシャッターを押してもらおう

「自撮り棒」を使わない限り、自撮りで腕の長さ以上にスマホを被写体から離して撮影することはできません。そのため、背景をうまく写り込ませることができなかつたり、スナップ写真のカジュアルさが強く出てしまったりということが避けられません。そこで、協力隊活動や現地の暮らしを象徴するような「ここぞ」というシーンに自分自身を入れて撮影したい場合には、自撮りをやめ、誰かにシャッターを押してもらいましょう。スマホでの撮影に慣れ

ていない現地の人の撮影は手ブレが避けられないので、同じ構図で複数枚撮ってもらった方が良いと思います。シャッターを押してもらえない人が周りにいない状況では、スマホ用に別売りされているスタンド(右写真)を使ったり、スマホをどこかに立てかけたりして、タイマー撮影をするのも手です。



③ワン・ツー・スリー法

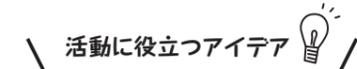
集合写真で現地の人々の会心の笑顔を引き出したいときには、撮影者と被写体になる人が現地の言語で声を揃えてゆっくり「1、2、3」と唱えながら、3枚の写真を撮影するという方法が有効です。おそらくいずれの言語でも「1、2、3」で口の形が異なるので、日本で写真を撮るときに使う「はい、チーズ」のように、多様で魅力的な表情を引き出す仕掛けになります。「はい、笑って!」とお願いするよりも、「1、2、3」を皆で唱えてもらうほうが、雰囲気や和み、現地の人々の柔らかな表情を引き出せる可能性も高まります。

④ポートレートモードを活用

背景をぼかすことによって被写体を際立たせる撮影モードの「ポートレートモード」は、人物の撮影だけでなく、料理の撮影でも威力を発揮します。ポートレートモードの機能を生かすためには、被写体に近づきすぎたり離れすぎたりしないようにするのがポイントです。ポートレートモードでは背景をぼかす強さも簡単に調整できるので、まるで一眼レフカメラで撮ったかのような写真を撮ることが出来ます。

⑤光に注目!

人の撮影でも料理の撮影でも、できるだけ自然光を使って撮影しましょう。被写体が蛍光灯の光に当たっていると、平たい印象の写真になってしまったり、人物の場合は血色が悪く写ってしまったりします。室内で料理を撮影する場合は、自然光が当たっている窓際にお皿を持って行って撮影しましょう。



改善の方法 ⑥

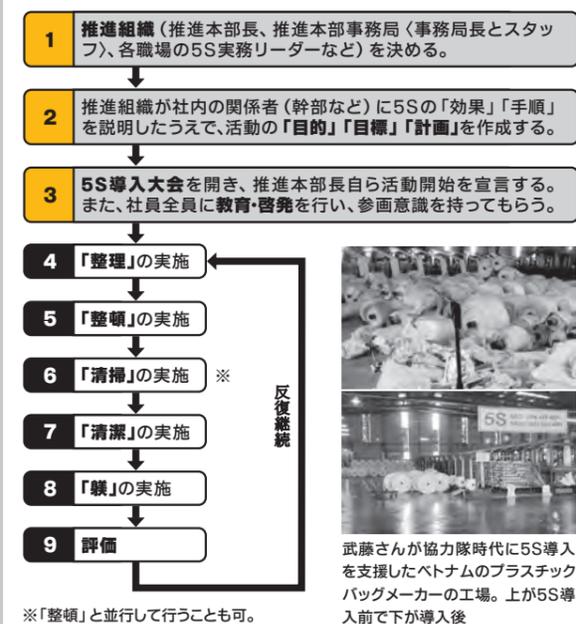
ナビゲーター = 武藤 正さん
(シニア海外ボランティア/ベトナム・品質管理・生産性向上・2016年度4次隊)

※派遣名称は派遣当時のものです。

5S活動

5S活動とは、「整理」「整頓」「清掃」「清潔」「躰」という5つの活動に順に取り組むことで、職場の環境や業務を改善する手法です。生産性・品質・安全性の向上、原価低減、生産ラインの稼働率向上につながります。また、職場の全員が一体となって活動に取り組むことにより、組織力やチーム力の向上にも効果を発揮します。5つの活動をローマ字で表記したときに頭文字がすべてSで始まるため、5S活動と呼ばれています。導入は下の図のような手順で進めます。

5S導入の実務手順



武藤さんが協力隊時代に5S導入を支援したベトナムのプラスチックバッグメーカーの工場。上が5S導入前、下が導入後

5つの「S」の概要

【整理/Seiri】

工具、機械、原料など職場にあるすべての物を「必要な物」と「不要な物」に区分し、不要な物を処分することです。

▶区分の基準(「使用実績が1年以上なければ不要とする」など)を決めてから行うとやりやすいです。

▶すぐに区分の判断ができない物については、「誰がいつまでに判断するか」を目立つよう赤い紙に書いて対象物に貼り付けておき、実践をフォローします。

【整頓/Seiton】

「整理」で「必要」と判断した物につき、使いやすい置き場所を定め、いつでも誰でも使える状態にしておくことです。

▶使った物が定めた置き場所に正しく返却されるよう、置き場所の「見える化」などをしておきます(本誌2020年10月号P.22を参照)。

【清掃/Seisou】

職場や使用する工具、機械を常にきれいにし、それらに異常があればすぐに発見・修理できるようにしておくことです。

【清潔/Seiketsu】

「整理」「整頓」「清掃」を維持・管理する仕組みをつくり、これらの適正な状態を保つことです。

▶方法の例:『「不要な物だと判断する基準」』『〈整理〉の頻度』『〈清掃〉の手順』などを文書化し、周知する』など。

【躰/Shitsuke】

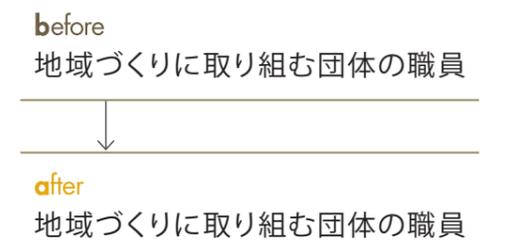
5Sを自立的に推進する人材を育てることです。

▶方法の例:「職場ルールの作成・周知」「5Sに関する教育の定期的な実施」「5Sの実施状況に関する各職場の定期的なチェック」「『垂れ幕』や『ポスター』などによる啓蒙」「5Sの成果に関する『発表大会』や『表彰』の実施」など。

5S導入に関する留意点

- ① 幹部(社長や工場長など)のリーダーシップで推進します。
- ② 組織の一部だけで行うのではなく、組織全体で推進します。ただし、導入時には一部の職場を「モデルエリア」とし、そこで実績を積んだ後に組織全体に広げると、導入がスムーズに進みます。
- ③ 3S(「整理」「整頓」「清掃」)だけではすぐに元の状態に戻ってしまうことが多いので、必ず「清潔」「躰」まで行います。
- ④ 左掲の図にある1~9のステップを一巡させるのにかかる期間の目安は、組織の規模によっても異なりますが、半年間から1年間です。

JICA Volunteers!
before ▶ after 人生を変えた2年間



HIV/エイズの予防啓発を目的とした2020年のイベント「AIDS文化フォーラム in 横浜」で運営に携わった横浜YMCAの職員や他の団体のメンバーたちと（後列右から2人目が白井さん）
出典：2020（第27回）AIDS文化フォーラム in 横浜

「白井さんのプロフィール」

公益財団法人横浜YMCA	after JICA Volunteer			before		
	2019	2011	2009	2006	2002	1981
設立：1884年 本部所在地：神奈川県横浜市中区 事業内容：健康教育、英語教育、専門学校等の運営、ワークキャンプの実施、子育て支援など、幅広く地域づくりの事業を展開。 ウェブサイト： 	4月、別部署に異動	1月、帰国 同月、横浜YMCAに再就職。横浜AIDS市民活動センターのセンター長に就任	1月、退職して青年海外協力隊員としてガーナに赴任	9月（公財）横浜YMCAに入職 1月、退職後、タイのエイズ孤児施設でボランティア活動に従事	4月、小売業の会社に入社 3月、明治学院大学国際学部国際学科を卒業	神奈川県出身
		協力隊経験が生かせるHIV/エイズ関連の仕事のポストに空きがあり、協力隊時代も横浜YMCAに活動の報告をしていたことから、再就職の誘いを受けることができた。	タイでのボランティア活動で自分の経験不足を痛感。横浜YMCAで積んだ経験を生かして再度海外でのボランティア活動に挑戦したいと考え、協力隊への参加を決めた。			

両国でHIV/エイズに関する

白井美穂さん

ガーナ・エイズ対策・2008年度3次隊
しらみみお



ピアエデュケーターを育成する講習を行う協力隊時代の白井さん

公益財団法人横浜YMCAでHIV/エイズの予防啓発に関する事業に携わった後、退職して協力隊に参加した白井さん。赴任したガーナでも、行政が行うHIV/エイズの予防啓発事業の支援に取り組んだ。協力隊活動を通じて広がった視野を買われ、帰国後は再び横浜YMCAに就職。HIV/エイズに関する市民活動を支援する施設の統括役に着任した。

クのYMCAと共同で運営する施設である。そこで暮らす子どもたちの日常生活やレクリエーションのサポートに取り組んだ。幼くしてエイズで親を亡くした子どもたちと過ごすなかで、HIV/エイズの問題を肌で感じることができた。一方、施設のスタッフに頼まれたことをこなすことしかできず、自身の経験不足を痛感。日本で仕事の経験をさらに積み、あらためて海外でのボランティア活動に挑戦したいと思うようになった。タイから帰国した後に就職したのは横浜YMCA。エイズ孤児施設でのボランティア活動が評価され、HIV/エイズに関する予防啓発のイベントなどの担当となった。海外でのボランティア活動への再挑戦として協力隊に参加したのは、横浜YMCAで約2年間働いた後だ。協力隊で自分が何を経験し、仕事についての考え方がどのように変わるかが見通せなかったことから、横浜YMCAは退職。職種は、タイや横浜YMCAでの経験が生かせる「エイズ対策」を選んだ。

高校生のころから海外で働くことに興味があり、大学は国際学部国際学科に進学。しかし、日本で社会人経験を積んでからでなければ海外での仕事はこなせないだろうと考え、卒業後の進路には日本でスーパーの運営を手がける企業を選択。神奈川県内の店舗に配属され、販売や商品管理などを担当した。

配属されたのは、ガーナ・イースタン州クワエビレム郡の役所。当時同国では国全体のHIV感染率は減少しつつあったが、若者の感染率は上昇を続けており、政府は若者を対象とする予防啓発を重点課題と位置付けて

海外で働くことに対する情熱が再び高まったのは、就職して3年あまり経ったころだ。半年間にわたって海外にボランティアを派遣する神奈川県プログラムを見つけ、退職して参加することにした。派遣先は、タイの首都バンコクにあるエイズ孤児の施設。教育や福祉など地域づくりの幅広い事業を神奈川県で進める公益財団法人横浜YMCAがバンコ

必要となる情報や場所を提供する横浜市の施設「横浜AIDS市民活動センター」のセンター長。横浜YMCAは市からの委託を受けてその運営を担っていた。

いた。そうしたなかで白井さんが取り組んだのは、郡役所が進める若者を主なターゲットとした予防啓発事業をサポートすること。地域や学校での講習や、ピアエデュケーターの育成などがその中心だ。それらを同僚と共に進めることで、彼にプレゼンテーションのスキルや啓発プログラムを組み立てる力などを身に付けてもらい、事業の活性化につなげた。

白井さんは2019年に「国際・地域事業」と称する部門へと異動。人身取引の対象となるおそれのあるタイの子どもや女性たちを対象とした自立支援の教育プログラムなど、海外や日本国内の各地でさまざまな種類の困難に直面している人に向けた事業を運営する部門であり、白井さんはHIV/エイズだけでなく、幅広い社会課題に取り組む立場となった。ガーナでは、部分的に自給自足をしたり、雨水をためて使ったりと、環境に負荷が少ない生活を営む人々を見てきた。それにより強まったのは、「持続可能な社会をつくること」への意識。今後はその実現に向け、私生活と仕事の両面で行える取り組みを探し出していきたいと、白井さんは考えている。

ガーナでの経験を発信

白井さんは派遣中、横浜YMCAの事業にとっても何かの参考になるかもしれないと考え、自分の協力隊活動の情報をかつての同僚たちにメールやブログで発信し続けた。すると横浜YMCAから、「戻ってこないか」と声がかかった。そうして帰国後まもなく、横浜YMCAに再就職することとなった。配属されたのは、民間の団体や個人がHIV/エイズに関して取り組む活動を支援する目的で、

*ピアエデュケーター…同世代間の強い信頼感による効果を狙った、若者から若者へ行う形式の啓発活動「ピアエデュケーション」でリーダー役を担う人。

よもぎま話

「日本社会への復帰」や「進路開拓」、「協力隊経験の生かし方」など、協力隊員の「帰国後」について、O・B・O・Gに語り合ってもらいます。



Cさん(男性)

【派遣前】
ゲーム制作会社の社内SE
【協力隊】
▶退職参加
▶・コンピュータ技術
・アフリカ
・2017年度派遣
▶県教育事務所に所属され、中等学校のIT機器の管理を支援
【現在】
テレワーク関連のサービスを提供する会社の社内SE

Bさん(女性)

【派遣前】
音楽配信を行う会社の社内SE
【協力隊】
▶退職参加
▶・PCインストラクター
・アフリカ
・2016年度派遣
▶中等学校に所属され、ICTの授業などを担当
【現在】
ITコンサルティング会社のPMOスタッフ（*6を参照）

Aさん(女性)

【派遣前】
ITシステムを開発する会社のSE
【協力隊】
▶退職参加
▶・PCインストラクター
・アフリカ
・2016年度派遣
▶職業訓練校に所属され、ICT（情報通信技術）の授業などを担当
【現在】
ITシステムを開発する会社のUI/UXデザイナー（*3と*4を参照）

- *1 パッケージシステム…さまざまな職場で使えるよう汎用性を持たせて開発されるITシステム。
- *2 業務システム…人事や経理などの業務の効率化を図るためのITシステム。
- *3 UXデザイン…製品やサービスのユーザーがどのような体験をするかを設計すること。「UX」は「User Experience」の略。
- *4 UIデザイナー…製品やサービスでユーザーが接する部分のデザインをする人。「UI」は「User Interface」の略。
- *5 社内SE…自社で使うIT機器やITシステムに関する業務を担当するSE。
- *6 PMO…プロジェクトのマネジメントに関する業務を専門に担う部門。「PMO」は「Project Management Office」の略。
- *7 スタートアップ企業…社会課題を解決する新しいビジネスモデルにより、急速な成長を狙う企業。
- *8 上流工程…プログラミングやテストを行う工程（下流工程）に先立ち、クライアントに要望のヒアリングを行い、開発するITシステムが満たすべき条件を確定する工程。
- *9 プロダクトデザイン…家具や文房具、自動車など立体的な製品のデザイン。
- *10 クラウド化…社内に機器を設置して運用してきたサーバーやソフトウェアを、インターネット経由で提供されるサービスの利用に切り替えること。



ITが持つ可能性

C 私が帰国後の再就職について考え始めたのは任期が終わるころだったのですが、お2人と違ってSEは続けたいと思っていたので、求人情報サイトなどで社内SEの求人を中心に探しました。派遣前に勤めていた会社にも再就職できるか打診し、可能だとの返事もあり、ほかの就職先が見つかったので戻ることとはやめました。現在勤務する会社は、派遣前に勤めていた会社で私の上司だった方が退職して立ち上げたもので、彼のほうから誘っていただけでした。そのため再就職にはさほど苦労しなかったのですが、働き始めてしばらくは、2年間のプランクを埋めるのが大変でした。携わっている業務の内容は派遣前と変わらないのですが、業務システムのクラウド化が進んでいからです。「ゆっくり覚えていってもらえばいいよ」とは言われたものの、1から覚えなければならぬことが多く、最初の半年ほどは勉強漬けの日々でした。

A

Bさんから「教育への興味が高まった」というお話がありましたが、その点は私も同じです。私が協力隊時代に授業を受け持ったのは日本の高校生にあたる学年だったので、「物を大事に扱う」といった習慣は、その年代になってから教育してもなかなか身に付かず、もっと幼い時期にどのような教育をするかがとても重要なのだと実感したからです。そうしたこともあり、帰国後に求人情報を探す際は「教育」も1つのキーワードにしてみました。私が現在勤務する会社は、教育機関の教職員の負担を軽減するためのITシステムを開発しており、間接的であれより良い教育の実現にかかわ

A 派遣前はパッケージシステムをつくる会社のSEとして、開発・販売した業務システムの保守業務を担当していました。協力隊は退職して参加し、職業訓練校でICTの授業などを担当しました。帰国後は、キャリアをデザインの仕事に切り替えるためにオーストラリアのビジネススクールで3カ月ほどUXデザインの基礎を学んだ後、教育機関向けサービスを提供する会社にウェブサイトのUI/UXデザイナーとして入社し、現在に至ります。

B 音楽配信を行う会社の社内SEとして、自社が使うITシステムの開発や保守に携わってから、退職して協力隊に参加しました。配属先は中等学校で、ICTの授業などを担当しました。帰国後はITに関するコンサルティングを行う会社に就職し、PMOの一員としてプロジェクトの管理に携わっています。

C 派遣前はゲーム会社の社内SEとして、自社内のIT機器やITシステムの管理に携わっていました。協力隊は退職しての参加で、中等学校のコンピュータ室の管理などを支援しました。帰国後はテレワーク関連のサービスを提供するスタートアップ企業に就職し、派遣前と同様、社内SEとして働いています。

帰国後の歩み出し

B 私は派遣前、帰国後はSEの仕事には戻るまいと考えていました。システム開発は頭でプランを組み立てていく上流工程なら染められたのですが、テストをしてはプログラムを修正することを延々と繰り返す作業などはどうしても好きになれなかったからです。そうして参加した協力隊では、貧富による家庭環境の差が子どもたちの成績にも影響することを実感し、「教育」への興味が高まりました。そこで帰

ることができるといのが、就職を決めた理由の1つでした。

ITが教育を変える力になるという点は、協力隊時代にも強く感じたことです。先生たちの意識の変化や能力の向上には時間がかかりますが、例えばアフリカの学校の地域間や学校間の授業の質の格差をなくすには、インターネットの環境を整え、児童や生徒にタブレットを普及させることで、村落部でもオンラインで均質な教育が受けられるようにしたほうが早いのではないかと思います。

B 確かにインターネットとタブレットはアフリカの村落部の子どもたちが質の高い教育を受けるチャンスを広げると思うのですが、その恩恵があらゆる子に行き渡るまでには相当な時間がかかるのかもしれないというのが、協力隊経験を通じて私が感じたことです。電波塔を増やして村落部のインターネット環境を良くしても、貧しい家庭が低料金でインターネットを利用できるようになり、かつそこに電気が引かれなければ、その家の子にタブレットが与えられても活用に限界があるからです。

C お金をかけてハード面を整備しても、実際に教育に生かされるまでには大きな溝があるということは、私も協力隊時代に感じました。私の派遣国は、初等教育と中等教育でITの教育が導入されており、私の同僚教員もそれなりにITに関する知識を持っていました。問題は、大学などの高等教育機関でITについて高度なことを学べる所がないことです。それを学びたい人は海外に出て、そのまま戻ってこない。そこで数年前、政府が大学生にノートパソコンを配るといふことを試みたのですが、生活費の足しにするために多くの大学生が売ってしまったそうです。とは言え、具体的な姿はわかりませんが、教育に限らずあらゆる分

国後に就職活動をする際、教育分野の求人情報も集めようとしたのですが、登録していた2つの転職エージェントの両方で「売手市場ですよ」とIT分野の求人ばかり紹介されました。私のキャリアではIT分野での再就職が妥当なのだろうと思ったのですが、やはりSEに戻るには避けたかった。そこで、転職エージェントの方に「上流工程なら楽しかった」と伝えたと、ITに関する知識を生かしつつ、システム開発の上流工程に似たタイプの業務に携わることができると現在の勤務先の求人を紹介されました。SEのほかにコンサルティングの経験を積むことで、キャリアの幅が広がる点も、就職を決めた理由の1つです。

A 私は大学でプロダクトデザインを学んでおり、もともとデザインの仕事に興味があったことから、派遣中にウェブデザイナーへの転身を考えるようになりました。オーストラリアにいる間から転職エージェントに登録し、少しずつ職探しを始めていたのですが、デザイナーとして就職したいという希望を伝えても、紹介されるのはやはりSEの求人ばかりでした。キャリアがあるのでSEとして再就職するほうがより高い収入が見込め、再就職から転職エージェントに入る手数料もより高くなるので、仕方がないのかなと思います。私は年齢的にもキャリア転換の最後のチャンスだろうと考え、収入が下がることは気にせずにデザイナーの求人を見つけることにこだわりました。今の勤務先に出会ったのは、「Wantedly」というSNSのような求人情報サイトです。求職者と企業がカジュアルにやりとりすることができるので、そこのやりとりを通じて、デザイナーの経験はないけれども、協力隊経験を含めて何か期待できそうな人物だと感じてもらえたのではないかと思います。

野でITが途上国の開発につながることは確かではありません。そのため、せっかく私はSEとして働いているのだから、いずれチャンスが訪れたならば、協力隊時代と同様に途上国の方々と一緒に汗を流しながら、ITに関して私を持つ知識や技術を伝えたいと考えています。そうしたチャンスを視野に、今も協力隊時代に使っていた言語の勉強は続けています。

A SEには戻らないだろうと思っただけで参加した協力隊でしたが、現地ではITの専門職はまだ一般的ではなく、「SEをやっていた」と言うことで尊敬の眼差しで見られることもあり、途上国でITが果たし得ることの大きさを感ずることができました。それもやはり私もいざITの力を途上国の教育の質向上につなげることに貢献したいと考えています。帰国後にわざわざオーストラリアまで行ってUXデザインを学んだのも、協力隊時代に使っていた英語の力をさらに伸ばしたいと思ったからです。現在もオンラインの英会話レッスンを週に1回受講し、いざ英語を使って働けるチャンスが巡ってきたときのために備えています。

B 私は帰国後の進路開拓で、教育分野の国際協力に携わる道も検討しました。しかし、私が大学と大学院で学んだのは平和学で、教育に関するバックグラウンドはありませんでした。そのため、教育分野の国際協力の仕事を得るためには教育学の修士号を取るなどする必要がありました。その後のキャリアを考えると、まずはもっと実務経験を積んだほうが良いだろうと思ひ、日本で再就職する道を選びました。しかし、いずれはタイミングを見て教育分野の国際協力に携わりたいと考えています。それが叶った際に十分貢献できるよう、当面は今の仕事でしっかりと知識と技術を身に付けていくつもりです。

「派遣国」や「職種」など、何かしらの共通項を持つ協力隊経験者によって構成するOB・OG会を、シリーズでご紹介していきます。

JOCV バレーボール会

会の目的

- 会員間の親睦を図る
- 会員の協力隊経験やノウハウなどを集積・活用することで、平和な社会づくりに貢献する



オリンピックに出場した選手とバレーボール隊員のOBによるパネルトークイベントの様子

Outline

正式名称	JOCVバレーボール会
設立時期	2015年1月
法人格	任意団体

Organization

代表者	三枝大地 (チリ・バレーボール・2004年度3次隊)
会員数	■正会員:44人 ■賛助会員:31人
入会資格	「バレーボール」職種のJICA海外協力隊経験者。ただし、他の職種であっても、会の趣旨を理解したうえで入会を希望すれば、正会員と認めることもある
会費	3000円/年。ただし、2020年度は1000円/年で、以降も当面は同様とする予定

Management

最高意思決定機関	会員総会
会員総会の頻度	毎年5~7月に開催
定例会の頻度	2カ月に1回
会員・役員間の主な連絡手段	2020年度よりWeb会議

Contact

問い合わせ窓口	■yoshimizu.ghn011@gmail.com ■https://www.facebook.com/groups/247101502714083/
情報発信の手段	https://www.facebook.com/groups/247101502714083/

青森県 青年海外協力協会

会の目的

- JICAボランティア事業を支援する
- その他の国際協力事業を支援する
- 会員間の親睦を図る

Outline

正式名称	青森県青年海外協力協会
設立時期	1972年
法人格	任意団体

Organization

代表者	對馬千佳子 (ポリビア・村落開発普及員・2004年度2次隊)
会員数	約160人
入会資格	■正会員:青森県在住の青年海外協力隊経験者 ■賛助会員:会の目的に賛同し、会員総会の承認を得た人
会費	なし

Management

最高意思決定機関	会員総会
会員総会の頻度	毎年4~5月に開催
役員会の頻度	不定期
会員・役員間の主な連絡手段	メーリングリスト

Contact

問い合わせ窓口	■CQT00243@nifty.com ■0173-72-1539 ■https://www.facebook.com/青森県青年海外協力協会-371357312911392
情報発信の手段	https://www.facebook.com/青森県青年海外協力協会-371357312911392

青森県在住の青年海外協力隊経験者などで構成する当会が設立されたのは、協力隊発足の7年後。以来、志を同じくする当県その他機関などと連携しながら、ねぶた祭りに会として参加するなど、国際協力や国際交流に対する県民の関心を高める活動に取り組んできた。

2014年から毎年開催してきたのは、「国際協力写真展」。これは、県にゆかりがある協力隊員が派遣中に現地で撮影した写真や動画を県内の美術館などで展示し、協力隊活動や途上国の様子を紹介するものだ。県民に国際協力事業への関心を持ってもらうことを目的としており、全国レベルの協力隊OB・OG会である（公社）青年海外協力協会との共同事業である。

コロナ禍に入ってから、オンラインを活用して活動を継続している。20年9月に開催した写真展は、当会のFacebookページに写真をアップロードするオンライン形式とした。また、同年11月には「Withコロナ Postコロナの国際協力」と題した2日間わたるオンラインイベントをJOCV東北と共催。協力隊活動が今後、どのような方向に進み得るかについて考えるトークセッションを行った。「コロナ禍をきっかけに、物理的に集まらなくてもできる活動を模索するようにになりました。ネットに慣れ親しんでいる若い世代の協力隊経験者には、ぜひ当会の会員となり、さまざまなアイデアをご提供いただきたいと考えています」（對馬代表）

①特別派遣前訓練生を県内の観光地に案内する当会のメンバーたち ②オンラインイベント「Withコロナ Postコロナの国際協力」の様子 ③同イベントのチラシ

「バレーボール」の職種でこれまでに派遣されたJICA海外協力隊員は延べ約3000人。その有志で構成する職種別OB・OG会の当会が設立されたのは2015年。取り組んできた活動にはいくつかの柱がある。1つめの柱は、バレーボール隊員の活動への支援。派遣前訓練で候補生を対象に特別講座を開くなどしてきた。コロナ禍に入ってから、バレーボール隊員として派遣予定の人を対象とする「コーチング」の講習会をオンラインで開催している。

2つめの柱は、バレーボール隊員としての経験を日本社会に還元する活動だ。専門誌『月刊バレーボール』への協力隊経験に関する寄稿、外国人選手が参加するバレーボール大会での通訳ボランティアなどが、その

具体的な取り組みである。

3つめの柱は、スポーツ分野で協力隊に参加した人が「スポーツを通して人材育成」について考えを深め、帰国後の仕事への示唆を得ることができるような機会の創出だ。17年には、オリンピックに出場したバレーボール選手とバレーボール隊員のOBが「バレーボールを通じて人材育成」について議論するパネルトークを開催した。

「当会の会員には、日本バレーボール協会やJICAとの関係を持つ人がいます。『スポーツ』や『国際協力』について情報やネットワークの幅を広げたいという協力隊経験者の方々には、ぜひ会員となり、当会を活用していただければと思います」（三枝代表）

先輩隊員の シューカツ記

就職先：

学校法人沖縄科学技術大学院大学学園 (OIST)

事業概要：科学分野の5年一貫制博士課程を置く、国際的で学際的な大学院大学

略歴

- 2017年3月、環太平洋大学を卒業
- 2017年7月、青年海外協力隊員としてブータンに赴任
- 2019年7月、帰国
- 2019年8月、沖縄科学技術大学院大学学園に入職

協力隊時代の活動を教えてください



配属校で体育の授業を行う比嘉さん

デチェンチョリン小・中学校（ティンプー県）に配属され、保健・体育の授業を担当しました。また、大学時代までサッカーをしていた経験を生かし、サッカーの普及やサッカーU-18ブータン代表チームでの指導などにも携わりました。

今月の先輩隊員：比嘉航也さん

出身地：沖縄県

職種：小学校教育

生まれた年：1994年

派遣国：ブータン

任期終了時年齢：25歳

隊次：2017年度1次隊



現在の所属先：人事ディビジョン・人事マネジメントセクション・赴任サポートチーム

県外や海外からOISTに入職する教職員の赴任、在留資格の諸手続の支援などを担当しています。

OISTウェブサイト

▶ <https://www.oist.jp/>

協力隊経験を応募書類にどう表現しましたか？

協力隊の職種と応募先の業務は内容が異なっていたため、協力隊活動の内容に触れることはできませんでした。しかし、現地の方々とのやりとりは英語で行っていたので、応募書類ではその点を強調して記載しました。

協力隊経験を採用面接でどう表現しましたか？

外国で現地の方々へ溶け込みながら暮らすこと、外国で仕事をするなど、協力隊経験のすべてが私にとっては有益なものだったので、その思いをありのままに伝えました。

就活で「このやり方は良かった」と思うことは？

情報収集には時間をかけ、自分が本当にやりたい仕事なのか、自分に合う仕事なのか、応募に必須の条件を確実に満たしているのかなどを精査しました。それにより、求人側に無駄骨を折らせることがないような応募先を選ぶことができました。

現在の仕事のやりがいを教えてください

私の担当業務は、初めて沖縄で暮らすOISTの教職員に対し、いち早く、よりストレスが低い生活の基盤を築いてもらうための支援をすることです。協力隊員として初めて海外で暮らした私自身の経験をそのまま生かせる点に、やりがいを感じます。

今後の抱負をお願いします

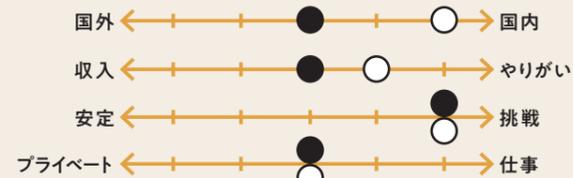
「人事」に関する仕事は奥が深いものだと感じています。その理解のための勉強をたゆまず進め、OISTの教職員に対してよりきめの細かい支援ができるようになりたいと考えています。

自己分析

強み	<ul style="list-style-type: none"> ■ 粘り強く物事を進められること ■ まずはやってみるという積極性 ■ 語学学習の継続（毎日行っている）
弱み	<ul style="list-style-type: none"> ■ 効率性を求めるあまり、自分だけで物事を進めようとしてしまう点
資格・経験	<ul style="list-style-type: none"> ■ 沖縄の伝統芸能を学んだ経験 ■ 小・中・高等学校の教員免許状

仕事選びの今昔。重視したのは？

協力隊参加前=● 協力隊参加後=○



就活の方針は？

派遣前は教員の道に進むことを考えていました。しかし、協力隊経験を通して英語でコミュニケーションを取ることの楽しさを知り、英語を使う仕事をしてみたいという思いが強くなりました。「英語を使う仕事」は幅が広いですが、留学生と接することで英語力の維持・向上も図れるだろうと考え、大学職員の就職口を中心に探すことにしました。

MESSAGE

コロナ禍で就活も予定通りに進まない状況かと思いますが、協力隊経験は私たちにとって1つの確かなアイデンティティだと思います。そこから広がる仕事の可能性を最大限に引き出せるよう、共にがんばりましょう！

応募…2社
書類選考通過…2社
内定…1社

内定

GOOD WAY!

質問の内容に不明な点があったときには、それについて確認する質問をしたり、少し時間をかけて考えてから回答したりする心がけました。それにより、「きちんと理解しながらコミュニケーションをする」と評価していただけたのではないかと思います。

面接

OISTの面接は日本語と英語で行われ、協力隊経験やキャリアプランに関する質問のほか、「どうしてもない状況になったときにどのような対応をするか」「新入職員を送迎することになった際、どのような会話をするか」など業務の具体的な状況に関する質問もありました。想定される質問について、すべて事前に日本語と英語の両方で答えられるよう練習しておいたことで、本番は緊張したものの、悔いなく考えを伝えることができました。

GOOD WAY!

協力隊員が持つ経験はさまざまです。私が書いた草稿について、協力隊の仲間にはそれぞれの経験を踏まえてアドバイスしていただいたのですが、それは日本で社会人を経験していない私にとってとても貴重なものでした。

書類審査

OISTに提出した書類は日本語と英語の履歴書とそのカバーレターです。英語での書類作成は初めての経験でしたが、書類を作成したのは協力隊の任期中だったので、ブータンの同僚やブータンで活動している協力隊の仲間に草稿をチェックしていただくことができました。彼らには英語の誤りだけでなく、独りよがりの表現になっていないかについてもアドバイスをもらうことができたため、さまざまな方に草稿を見ていただくのは大切だと思いました。

情報収集

応募先の就職相談会、就職希望者を対象とするメーリングリスト、ウェブサイト、SNSなどを活用しました。さまざまなSNSを使って、応募を考えている大学の学生たちがどのような様子なのかを確認したりもしました。また、私は日本での社会人経験がなかったため、より幅広い視野で応募先を検討するため、ほかの業種の友人からも仕事や就職について情報を集めたのですが、これは「就職に関する情報を見る目」を養ううえで有益でした。

GOOD WAY!

OISTは、職員としての就職を希望する人を対象に、現役職員の声を聞いたりキャンパスを見学したりできる「ジョブフェア」を開いています。そうした機会は、応募先の詳しい情報を得る最良の手段だと感じました。

就職!

帰国の1カ月半後

帰国の1カ月後

帰国の1週間後から 帰国

帰国の半年前から

帰国の1年前から

シューカツ
START



JICA 海外協力隊ウェブサイト「帰国隊員の進路開拓についての相談受付」
▶ https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/counselor/

※進路相談の対象は、青年海外協力隊および日系社会青年海外協力隊経験者のみとなります。
※カウンセラー/相談役により対応可能な日が異なりますので、あらかじめ電話またはメールでのご連絡をお願いします。



①西田体操教室に通う子どもとコーチたち ②世界選手権に出場した西田体操教室の教え子。現在はコーチとして教室の運営に携わっている ③クラウドファンディングを利用して2018年に建設した、西田体操教室として初となる自前の体育館 ④「Tumble Kids」で指導にあたる西田さん。「ハイタッチ」で子どもが喜ぶのは、ジャマイカも日本も同じです。(西田さん)

Tumble Kids 代表

にしだ 慎さん

- ジャマイカ
- 体操競技
- 2004年度1次隊

器械体操&英語を教える 体操教室をスタート

ジャマイカで当時唯一だった体操教室で協力隊員として指導に携わった西田さん。任期終了後、オリンピック選手の輩出や競技人口の拡大を目標に現地で体操教室を立ち上げ、運営してきた。その活動にひと区切りを付けて帰国し、京都市で「英語を使う体操教室」をスタートさせた。

PROFILE ●にしだ 慎

1981年生まれ、京都府出身。高校と大学で体操競技部に所属。大学時代に体操クラブで指導員を務める。2004年7月、青年海外協力隊員としてジャマイカに赴任。当時同国唯一だった体操教室での指導などに取り組む。07年1月に帰国。08年、ジャマイカに移住して体操教室を開業し、経営と指導に携わる。13~14年、3カ所に新たな教室を開業。19年に教室の経営者としての立場を保ったまま帰国し、20年4月、英語を使う子ども向けの体操教室「Tumble Kids」を京都市でスタート。



JOCV SPORTS NEWS

平和・平等・協力・健康……「スポーツが持つ力」と自身の専門性を掛け合わせ、未来をつくりあげるJICA海外協力隊経験者たちの現在の活動・仕事を紹介します。

2

2020年4月、「器械体操」と「英語」の両方を一緒に教える体操教室が京都市で初めて誕生した。「宙返りする子どもたち」を意味する「Tumble Kids」と名付けたその教室を立ち上げたのは、英語圏のジャマイカで体操競技隊員として活動した経験を持つ西田慎さんだ。京都市は西田さんの出身地である。

現在、幼稚園のホールなどを借りて、年中の園児から小学4年生までを対象とする1時間のレッスンを週に8回開催。選手の育成は目指しておらず、指導するのはマット運動や鉄棒運動などの基礎的な技だ。レッスンでは指導する側も子どもも英語と日本語を併用。20年は小学校で英語教育が始まったタイミングでもあり、入会希望は後を絶たない。

「器械体操は、練習しないとできないけれど、練習すればできるようになる技が多いスポーツであり、『努力すればできるようになる』ということを学ぶのに適しています。一方、子どもが英語を学ぶ際、ただ座って学ぶよりも、楽しめるアクティビティを行いながら学ぶほうが効果的だと言われています。そうしたことから立ち上げたのが、「Tumble Kids」でした」

ジャマイカの体操教室

西田さんが体操教室の事業を立ち上げたのは2回目だ。1回目は、協力隊の任期を終えて約1年後の08年。派遣国のジロ五輪への出場は叶わなかったものの、世界選手権大会は15年に1人、17年に2人の教え子が出場を果たした。いずれも貧困地区で育った選手だ。

リオ五輪の後、西田さんが帰国に向けて行ったのは、教室運営を現地のコーチに委譲すること。レッスンには参加せず、指導をすべて現地のコーチに任せようとした。彼らのなかには長年、西田さんの教えを受けてきた貧困地区出身の選手もいる。そうして19年、彼らに指導を任せるとも問題ないと確認できたことから、西田さんは教室の経営者としての立場は維持しつつ、日本に帰国することにした。教室の数は4つ、会員は約800人、コーチは約30人という規模の事業となっていた。

なかったものづくり

ジャマイカで器械体操の指導をした経験は現在、「Tumble Kids」での指導にさまざまな形で生きている。例えば、ジャマイカの子どもと比較しながら日本の子どもを見ることができるようになったため、日本の子どもに適した指導の方法をとることができるようになったことだ。両国の子どものもつとも大きな違いだと西田さんが感じているのは、「失敗」の受け止め方。レッスンで誰かが技を失敗すると、周りの子どもたちが笑って囃し立てる点は共通だが、ジャマイカでは、失敗した子はその後もあっけらかんと練習を続けた。一方、失敗した日

ジャマイカに戻り、「西田体操教室」を開業した。きっかけは、協力隊時代の経験にあった。ジャマイカでは貧困地区の子どものために手が染めるケースが多いといった問題があった。西田さんは当時ジャマイカで唯一だった小さな体操教室で指導に従事するが、貧困地区の小学校などに出向き、「倒立」や「逆上がり」など特別な器械を必要としない技を子どもたちに教えた。「努力する力」や「規律」など、道を逸れずに生きていくために必要な力を身に付けてもらえると考えたからだ。当時同国の体育授業では器械体操が取り入れられておらず、子どもたちは馴染みがなかった技の習得に夢中になった。やがて彼らには、レッスン中に順番を守ったり、レッスン後にコーチにお礼を言ったりといった態度の変化が見られるようになる。そうして西田さんは器械体操が持つ人づくりの力を実感したことから、同国で新たな体操教室を開くことにしたのだ。

体操競技の大会で活躍できるような選手も育成し、競技人口の拡大につなげたいと考えて、西田体操教室では高度な技術を教えるレッスンも行った。一方で、貧困地区の子どもたちを対象とする無料のレッスンも設けた。

開設時、西田さんがそこで指導を続ける期間の目安と決めていたのは8年間だ。16年にブラジル・リオデジャネイロで開催されることが決まっていたオリンピックに教え子を出場させることを目標とし、たとえそれが叶わなくてもひと区本の子は恥ずかしそうな様子を見せたり、ときに泣き出したりしてしまう。「失敗することにプレッシャーを感じたら、新たな技を身に付ける挑戦をしくなくってしまいます。そこで「Tumble Kids」では、事あるごとに「失敗するのは当然」と伝えるようになっています」

英語の指導に関しては、西田さんにとって「Tumble Kids」が初めての経験であり、試行錯誤が続いている。例えば、レッスンに参加する子どもたちの英語力には差があるため、英語の自習教材となる動画をつくり、参加する子どもたちに配布。実際のレッスンを録画し、そこでよく使われる語句を洗い出したうえで、それらの発音や意味を学べる教材をつくった。

協力隊後の10年あまりを捧げてきた西田体操教室と「Tumble Kids」について、そのモチベーションのありかには「現地になかったものをつくり上げる楽しさ」にあったと、西田さんは振り返る。「なかったものをつくり上げること」への挑戦に私が強いモチベーションを感じるのには、体操競技の選手として「努力し、新たな技を身に付けていくこと」の楽しさを何度も味わってきたからなのかもしれません。その意味でも、体操競技は私という人間の根幹を築いてくれたのだと思います。今後も、スポーツが持つそうした力を多くの人々に享受していただきたいと考えたいです」

つぶやき

お題 ▶ 味付け



イラスト=牧野良幸



今月の1枚

人生の味付け

派遣前、我が家の台所には当たり前のように醤油や酒、みりんなどさまざまな調味料が並んでいた。しかし、派遣国での味付けは基本、ココナツ。すごくおいしいのだが、単調さに飽きてくることもしばしばだった。帰国した後、相変わらず我が家の台所に並んでいた調味料たちを見て、物思いに耽った。見慣れていた光景が、派遣前とは違って見える。人生に新たな味が加わったのだなと、少し幸せな気分になった。

ペンネーム：からげぼーとまん さん（大洋州・体育・2018年度派遣）

★隣の晩ご飯

任地を歩いていると、あちこちの家から「ご飯を食べていきなよ!」と声をかけられました。ご厚意に甘え、あちこちの家でご飯を頂いていくと、同じ料理でも家庭によってこんなにも味付けが異なるのだとびっくり。昔テレビで観た「突撃!隣の晩ごはん」のヨネスケさんも、こんなふうに感じていたのかなと思いました。

ペンネーム：アフォーノでした さん
（アフリカ・コミュニティ開発・2018年度派遣）

★★発想力

高齢者の生きがいづくりを支援する「高齢者学校」が私の活動先の1つだった。そこでは週に1回、おじいちゃんやおばあちゃんたちが学生服を着てやって来る決まりになっていた。それが日常に変化をもたらす良い味付けとなり、皆さん少年少女に戻ったように生き生きしていた。この発想力、見習っていきたいなあ。

ペンネーム：ねじまき鳥 さん
（アジア・高齢者介護・2017年度派遣）

★★★ここにもお風呂文化

標高が高くて年中寒い任地でしたが、火山が多い地域であるため、温泉を使った浴場がありました。なかには石でつくった浴槽を置く個室の温泉浴場もあり、当時そこは地域住民の方々にも大人気なバズリスポット!! 活動で1万歩以上歩いた後の入浴は、まさに至福のひとつで、協力隊生活に味を添えてくれました。

ペンネーム：KAMA さん
（中南米・栄養士・2017年度派遣）

募集中のお題

「目覚まし」「誕生日」

投稿は『クロスロード』編集室まで
（P35をご覧ください）

あなたのつぶやきが
イラストになるかも!?

「職員等に対するJICA理事長表彰」で、 JICAボランティア事業に関与する全ての部署の職員が大賞を受賞

JICA事業に対する職員などの貢献について顕彰する「職員等に対するJICA理事長表彰」で、2020年度は「JICA海外協力隊の退避及び新たな挑戦に関与された全ての部署の方々」が大賞を受賞しました。新型コロナウイルス感染症の拡大により、20年3月より全協力隊員の一時帰国が余儀なくされたなか、一時帰国する協力隊員の帰国フライトの調整や空港への出迎え、帰国後の自主隔離場所へ

の搬送、メディアなどからの問い合わせ対応、メルマガなどによる一時帰国中の隊員とのコミュニケーションの継続、再度の協力隊参加を可能とする特別制度の設置と運営、一時帰国中の協力隊員に対する各種セミナーや語学レッスンの開催など、コロナ禍でのJICA海外協力隊員の新たな挑戦に対するサポートが評価されたものです。

「世界の笑顔のために」プログラムの募集を まもなく開始

スポーツ、文化、教育、福祉などの分野で使う物品のうち、開発途上国が支援を必要とするものの寄贈を日本国内で募集し、協力隊員やJICA在外拠点を通じて各国に届ける「世界の笑顔のために」プログラム。毎年2回物品の募集をしており、2021年度の1回目は4月上旬を予定しています。詳細については、JICA海外協力隊のウェブサイト（QRコード）でご確認ください。



無料職業紹介事業をスタート

JICA海外協力隊経験者の帰国後の社会還元活動への支援をより充実させるため、JICAは2020年12月に無料職業紹介事業の資格を取得し、求人情報を個別に紹介することが可能となりました。紹介する予定の主な求人情報は、日本国内での多文化共生や地方創生などに関する自治体や公的団体、NPO法人に関するものです。詳細については、JICA海外協力隊のウェブサイト（QRコード）でご確認ください。



■対象者

- ① 任期を満了した長期派遣のJICA海外協力隊経験者
- ② コロナ禍により、やむを得ず任期を満了することができなかった長期派遣のJICA海外協力隊経験者

■お問い合わせ先

JICA青年海外協力隊事務局 人材育成課 無料職業紹介事業担当
TEL: 03-5226-9323
FAX: 03-6672-1723
E-mail: jvthd@jica.go.jp
受付時間: 平日9:30~12:30、13:15~17:45

2021年度1次隊の派遣前訓練を開始

コロナ禍により中断していた集合型の派遣前訓練を、4月に2021年度1次隊から再開します。21年度は、新型コロナウイルスの感染予防を目的に、年度の派遣隊次を5隊次に増やして各隊次の人数を減らし、派遣前訓練の期間も従来の70日間から45日間に短縮して実施する予定です。派遣前訓練の前の技術補完研修については、実施方法を調整中です。派遣前訓練の最新情報については、JICA海外協力隊のウェブサイト（QRコード）で逐次ご案内いたします。



クロスロード

令和3年4月号【第57巻第3号 通巻665号】
発行日 令和3年4月1日

編集・発行：
独立行政法人国際協力機構青年海外協力隊事務局
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1
竹橋合同ビル

『クロスロード』は
JICA海外協力隊の
ウェブサイトでも公開
しています。



ご意見・ご感想をお聞かせください。 アイデアも大募集!

今月号をお読みになり、どのようにお感じになりましたか? ご意見・ご感想をお寄せください。また、今後取り上げてほしい企画のアイデアや、ご紹介いただける情報がございましたら、ぜひお知らせください。

以下のようなアイデア・ 投稿を募集中です

- 派遣国での活動・生活の“失敗談”をお寄せください。
- 派遣国での活動・生活に役立つ“ちょっとした技”をお持ちでしたら、ご紹介ください。
- P34に記載している「お題」で、派遣国での活動・生活のひとコマをつぶやいてみませんか。
- 日本でもつくりことができる派遣国の料理のレシピをお寄せください。



一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp



隊員めし

おかわり!

日本でつくる現地の「めし」は活力の源



スリランカでは昔から、一日に数回、決まった時間に紅茶を飲む習慣があります。私は派遣中、任地の方と一緒に紅茶を飲む際にたびたびヘラパをごちそうになりました。雰囲気は柏餅に似ているため、初めて食べたときには遠い異国の地で日本を思い出し、なんだか胸がじ〜んとなったことを覚えています。キャンダの葉は日本では入手が難しいので、ここではアレンジバージョンをご紹介させていただきました。甘〜いヘラパは、プレンティーのお供にぴったりです♪



教え子たちとヘラパをつくる協力隊時代の但木さん



今月の料理人

ただき 但木あかねさん
(スリランカ・料理・2011年度2次隊)
●活動内容：ホテルで働くための技術を教える専門学校「ホテル学校」(アハンガマ)に配属され、日本料理の指導に従事。

スリランカの伝統菓子「ヘラパ」風の柏餅

材料(10個分)

- 団子粉(うるち米粉と餅米粉がミックスされた市販のもの)…200g
- 米粉…100g
- ココナツファイン(ココナツを細かく砕いて乾燥させたもの)…100g
- きび砂糖(普通の砂糖でもOK)…100g
- 柏の葉…10枚

作り方

- ①鍋で水200ccを沸かしてきび砂糖を加え、トロツとなるまで加熱する。
- ②①にココナツファインを入れ、混ぜながら水分がなくなるまで煮詰める(ココナツあんの出来上がり)。
- ③団子粉と米粉を混ぜ、水250ccを少しずつ加えながら練り、耳たぶくらいの硬さにする(餅の出来上がり)。
- ④③を柏の葉に乗せて1cm以下の厚みに伸ばし、②を乗せてふたつ折りにする。
- ⑤④を鍋で20分ほど蒸せば出来上がり。

ひとくちメモ

四石稗(しこくびえ)の粉と赤米(あかまい)の粉でつくった餅に、ココナツベースのあんを乗せ、シンハラ語で「キャンダ」と呼ばれるトウダイグサ科の植物の葉で巻いて蒸すスリランカの伝統菓子「ヘラパ」。日本の「柏餅」に似ているので、今回は日本で入手が容易な材料を使う「ヘラパ風柏餅」のつくり方をご紹介します。スリランカでは、ヘラパにカルダモンやシナモン、グローブなどのスパイスをふんだんに使います。また、あんを餅に混ぜてしまうなど、家庭によってもつくり方にバリエーションがありました。



キャンダの葉

蒸し上がったヘラパ



今月号の表紙 ウガンダ



もり あやこ
文=森 亜矢子さん
(PCインストラクター・2017年度2次隊)

私がICTを教えた女子中等学校には、80台ものパソコンがありました。問題は毎日のように起こる停電です。自家発電機は燃料代が高額なため、使用するのには国家試験を受験する学年の授業に限られていました。そこで私は、担当していたほかの学年のICT授業で停電になった際、タイピングスキルの向上を狙った「キーボードパズル」を実施。表紙写真は、そのひとコマです。詰め込み式の授業ばかりを経験してきた生徒たちだったので、大好評でした。
※森さんの活動の詳細は8〜9ページで紹介しています。